なる家鴨の逃場を失つてうろ〳〵家のめぐりをかけまはつてゐる、百姓屋の夏景色のさまなり、　○谷口蕪村 攝津の人、畫家にして俳人なり、天明三年歿す　○短夜やなみうちぎはの、すて篝 夏のあけぼのに、海邊にすてかゞりがもえて居るさては昨夜漁夫どものたきすてたのであらう、夏の夜の短かくてかゞり火のもえ終らぬ中に夜の明けたる景色なり

一〇、聖駕の凱旋を賀し奉る表

○陛下 天皇皇后太后皇太后に奉る尊號　○資 うまれつき、○天資　○列聖 代々の天子　○洪緒を纘ぎ 大なる事業をつぐ、天皇の位につきて天下を治めたまふをいふ　○群品 百官　○霑ひ　○盟を渝へ 約に反く　○拯難 難義を救ふ　○震怒 天子の御いかり　○大本營 天皇自ら軍事を統監し玉ふ本陣　○供御を損じ めしあがりものをへらす　○宵夜旰食 朝はあけはなれぬ内より起き出で衣をつけ、晩には日くれて後食事をする、即朝夕勉勵して事に從事せらるゝをいふ　○統べ 統御　○百僚有司 もろもろの役人　○皇謨 天皇のはかりごと、政事　○贊襄 助け奉る　○納れず　○懷く　○天兵 天子の兵　○鷄犬も驚く 人民を掠奪する等の事なきをいふ　○渝盟 違約　○幣を納れ 償金を出す　○媾和 なかなほり　○訂しぶ むすぶ　○善鄰 隣國にまじはる、なかよくする　○舊誼 もとのよしみ　○版圖 領地、新に土地を取れば地圖に書き入れるを以て版圖といふ　○光華　○六合 天地四方　○現御神 主上のこと　○威稜 みゐづ　○五洲 世界の五大洲　○伊弉諾尊　○伊弉冊尊　○天の瓊矛　○大八洲國を畫き成し 伊弉諾冊二神、天上より天の瓊矛を以て、大海をかきまぜて矛を引き上げ給ひし鹽のしたゝりよりなりしを、おのころ島といふ、即二神こゝに天降り給ひて、それより日本の國々をつくり給ひしよし神代記に見ゆ　○寶劍 三種の神器のひとつ　○天つ日嗣を繼く 天子の位　○神璽 みしるし　○三韓 今の朝鮮なりもと馬韓弁韓辰韓の三つに分る（神功皇后の三韓征伐）　○肅愼 今の蒙古なり、（阿部比羅夫の征伐せしところ）　○細矛千足 日本の古名、武勇のすぐれたる意　○天業 天子の業　○恢弘 ひろがり弘れる　○報效 國恩に報ゆ　○華冑 華族　○藩屛 まもり、藩屛は家の四方をめぐらすまがきのこと、即家のまもりとなるもの、故に華族を國の　○

簾屏さい ふなり　○丹誠（たんせい）○赤誠　○聖駕（せいが）の、陛下のこと　○還幸（くわんかう）へり　○以聞（いぶん）申上げる　○

萩野（はぎの）由之（よしゆき）文學博士、東京帝國大學教授

一一、城墟感懐（じやうきよかんくわい）

○一（ひと）とせ或年　○筑波山（つくばやま）筑波郡　○常陸國の朝廷をいふ延元三年、顯房、その子顯信と共に義良親王を奉じ、海上陸奥に赴かんとて、颶風にあひ常陸東條浦に漂着し、阿波崎、神宮寺の二城によりて敵兵と戰ひ、軍利あらずして小田城に入る　○たゞにやはべけんやとて　このまゝに過ぐ　○木深（こぶか）き　鬱蒼　○かうがうしく　神々（がう）しく　○廣前（ひろまへ）前　○額（ぬか）づき拜す　○そこはかとなく　ここ、ここともなく、あてどもなく　○ひきくく　低　○たゞならぬ（ゆはれ）あり　○祝部（はふり）神官の　○源准后（みなもとのじゆんこう）准三后の略稱、三后になぞらへて待遇せらるゝ重き位なり、三后は太后太皇、后大皇、皇后をいふ　○大寶（たいはう）の城那大寶村に今もその城址あり、興國年中、城主下妻政泰、興國親王を奉して城を守り關城の聲援をなしし所なり　○追手（おつて）城の表門　○搦手（からめて）城の裏門　○つばら　つま　か、くにしい　○矢（や）のしり○鏃　○この湖（みづうみ）霞が浦　○北（きた）ざま方　北　○關（せき）の城　河内村にその址あり、南朝の時、關宗祐、北島親房を小田城より迎へ、賊軍高師冬を拒ぐこと數年、興國四年城遂に陷る、宗祐父子自殺し、親房芳野に還る　○小田（をだ）の城　八田紀久、親房の常陸に漂着するや、城主迎へて賊軍に抗すること數年、力つきて遂に敵に下る　○およびごと　指の　○御軍（みくさ）官軍　○きは際　○大宮人（おほみやびと）禁中に仕ふる人　○東（あづま）の皇軍（みいくさ）　○六所（むところ）○とゝのへる治め　○いみじき甚し、職原鈔（しよくげんせう）宮中制度の沿革を記せるもの　○神皇正統記（じんわうしやうとうき）神代より後村上帝までの日本の歴史にして皇統のみだすべからざる所以を述べたるもの　○大御門（おほみかど）朝廷の　○あづまをのこ關東男兒　○ためし例　○まめやか實　○やゝやゝ段々○漸く　○いきどほろし立たしきこと　○なげかはしく腹　○業（わざ）事　○ほぐくまんふ養　○田舍（ゐなか）わたらひ地方を遊歴す　○そのかみに生（い）まれ出でなばその當時に生れたらばいか

なりけん

一二、熊王發心（ほっしん）佛法に歸依ずること

○判官（はんぐわん）諸の官人は四の階段あり、かみ、すけ、じょう、さくわんこれなり、判官とはじょうの位なり、○赤松光範（あかまつみつのり）圓心の孫にして○津の國（つのくに）攝津の守護たりし時、楠正儀河内の國の○かため護守　○左馬頭（さまのかみ）馬寮官名○正儀守なりしかば、常よ攻め合ひたるなり　○はかられ（だまされ）　○口をしくに殘念　○去ぬる年去ル　○宇野（うの）の六郎光範のみがはりとなり　○心を ゆるし申さざるべきさもあるまい　○たより宜便　○心もとなし心不安　○かたみ念紀　○をとなしくろ大人な○成人　○參りてこそれ」などの下に「目的を達することもあ　○力およびなく是非　○本意（ほいもくてき）本望○素志　○具して（ぐして）つれ　○大夫尉（たいふのじょう）　○さすらへ○流浪　○さかさかしく

實なしくにて、りが　○官仕（みやづかへ）君につかへなること○怜悧　○しらさむ治めさせん、領地を興へんとせしなり　○恥（はぢ）ある一矢（ひとや）名譽の矢一筋を射て、軍に出てたがらをたてた上の意　○七めぐり忌七回　○手向（たむけ）前にそなへ向ること、ふかう　○元服（げんぷく）男子十五歳になれば髪をなろ式を拳ぐ　○髻（もとゞり）とりあげ元服の時、子供の髪をあげて結ぶこと　○正寛（まさひろ）この南朝の○吉野殿天子　○賜び　○譜第（ふだい）家の　○おぼつかなく心もとなく　○たゝには容易の事にはあらず、一通りでない　○はたらかせねば自殺させぬなり　○形（かたち）をかへ髪を切り僧となる　○正寛（しやうくわん）　○草の庵（くさのいほり）草ぶきの小屋○草庵　○吉野拾遺（よしのしふゐ）南朝の事跡を記したるもの全四巻、松翁の作也、

一三、武士道（ぶし）

○尚武（しやうぶ）の氣象（きしやう）武を尊ぶ氣風　○胚胎（はいたい）生ず、　○成形（せいけい）なりたち　○支配（しはい）さしづ、きりもりする　○道義（だうぎ）みちのをき　○道徳（だうとく）

○實行武力の實　○一種の氣象精神をいふ　○基礎ごだい　○儒教孔子の教へ　○禪佛教の道

○融合調和一致する　○特異だん　○人倫人間の守るべきみち　○秋霜烈日夏のやけつくやうな日に譬らされるが如きはげしくきびしきをいふ　○ストア哲學宗教倫理を中心とせる實踐的哲學　○騎士風歐州の中世紀に行はれしものに似て名を重んじ、心寛かに禮義ありて強をくぢき弱をたすけ一種の制度にして、又當時の理想なりしなり

○侮辱はづかしめる　○封建制度領主を地方々々におきて、其地方の政治を行はしむる制度をいふ、即大名政治にして我國維新前まで封建制度なりし　○壞滅たれる　○形骸ち　○志士爲に盡す人　○與し（加担）　○扶翼たす　○異

○聖人の道にあらざる説のことにて、こゝは武士道を害するものを指したるなり　○撲滅うちほろぼす　○閉鬱ま　○精確たしか　○運用の行使　○果斷決行てやる事　○井上哲次郎しるす文學博士にして東京帝國大學教授

一四、如意輪堂大和芳野の後醍醐天皇の御陵の傍にあり

○安部野の合戰細川顯氏、山名伊氏の勢六千余騎を、楠正行、三千余騎にて安部野に擊破したる激戰なり　○堰き落されて敵兵皆先を爭ひ渡邊の橋を渡らんとして溺死する者おびたゞしかりしをいふ　○かひなきたゝぬ　○秋の霜「霜月廿六日の事なれば」を此所におきて解すべし　○氷　○小袖着ける衣　○引きこゝ與へる　○物の具かぶと　○色代して禮を　○京勢の賊、足利方の軍なり　○むげん急に集め　○催勢る軍勢　○楯刀　○正行　○舍弟　○庇躬わいこと病身にてよ　○威を碎き威勢をやぶり　○先朝後醍醐天皇を申す　○宸襟天皇の御心　○扶持養ふ　○御代に卽け天子の御位につけ奉る　○手を碎き手を違し　○遺言おき　○武略武士の意なり　○有待將來事業なさんと、その時機を待つ身にしての意、（死を待つ身、即一度はしぬ身と解するは誤れり）　○思ふに任せぬ習はうきよのならひ　○早世じにに

○雌雄まけ　○龍顔御顔　○參內朝廷に　○傳奏の役人　○直衣　○濡し　○主上
後村上天皇　○南殿紫宸殿のこと宮中の正殿なり　○照臨御覽○みそなはす　○叡慮御心　○累代々　○神妙○殊勝
○安否安危さい　○進退かけひき　○度に當りうること　よろしきを　○機に應ずをりを見てよき方法をとる○臨機應變
○心懷本　○手を下すくちばしをいれ、さしづする　○股肱くにたよりに思ふ　○敕答御　○最後この世の
○新發意入りしものをいふ　○先皇天皇　○御廟如意輪堂の側にあり　○過去帳死者の名を記
○行宮かりごてん　○うへのをのこ殿上をゆるされた人、○殿上人　○五月雨　○都だに云々繁華な都會でさへも五月雨の頃はさびしかつたのに、かかる雲の晴間なき吉野山の奥に來りてはことにさびしさにたへぬ　○烏のねに云々「烏の音」は鶏人の曉を唱ふることにて、御垣守の者が火の用心とて夜まはりをするなり、其夜まはりの聲に眠がさめて曉方のねざめにつく〳〵と國をごう治めたらよいかと心配する　○身のよそに云々我身は出家して、うき世を離れて居るけれども、以前殿中にありて宮中の花を見て樂しみし昔のことが思ひ出されてこひしいとなり　○みはしのはなてんの庭の花をいふ　○蟄中の間　○あやめひく云々五月端午の祝日には菖蒲をさつて枕の下にしく也、我は始終旅に出て草の枕に寢るのだが、今晩はなつかしき都の人も草枕をするで有らう　○文貞公　○めぐりあふ云々生きてゐてもとても會ふ事もでみんより死んだ方がましである　○なかなかにての意　○勢多　○けふのみと云々命はけふかぎりと思ふ夢ぜたの長橋といふ長い橋をわたるとはどうしたものぞ　○故郷に云々年が立つた事であるから今ま故郷に生きて歸つたところ立つた友も死んでしまつて昔がたりをする人もゐぬで

一五、はれぬ雲

題をさぐり歌の題をとりて　○五月雨　○都だに云々　○烏のねに云々　○身のよそに云々　○みはしのはなてんの庭の花をいふ　○蟄中の間　○あやめひく云々　○文貞公　○めぐりあふ云々　○けふのみと云々　○勢多　○なかなかにての意　○故郷に云々

有ら
う

一六、福原

○水無月六月陰暦　○都うつり　治承四年六月二日、都を福原にうつす、初め平清盛、別業をこゝに營繕等の地にして内裡の趾は林田村長田の東、輪田の西野なりといふ　○思の外外意　○京安平　○ことわり道理　○いふかひなく　しかたなく、彼是といふかひがない　○蔭を憑む　御恩をたのみにする　○とく〳〵はや　○餘される　世人より度外視され餘されるの意　○人かずに入らぬ　○期する所　こゝろたのむところ　○軒を爭ひし　軒をならべて繁昌せし住家をいふ　○馬鞍事のみを重んぜらる　○牛車　時、牛車の用ゐる事少くなれる也　○西南海の所領　道の領地を顧ひて都に遠くて武人の跋扈する東北國の領地を好まずなり　○荘園地領　○おのづからふしをり　○事のたより　用事のついで　○條里を割る　土地がせまくて市町の區劃をなすに足らぬ、條里などの作り方に及ばぬの意（條は北より南に通するをいふ、十六町を一里とし、六里を條とするに足らず　起りて南に行くをいひ、里は西より東に通するをいふ、十六町を一里とし、六里を條とす）　○内裏所　御すまひ　○木の丸殿　まるでん木をけづらず、丸木のまゝにて建てたる御殿をいふ、天智天皇、筑紫に行幸したまひて筑前朝倉の山中に行宮を建て給へる時、丸木のまゝにて建てられしより、これを傳ふ　○なかなかの　さうはいふものゝ、かへつて　○やうかはりてはりで　○優なる　風流な　○故郷平安　○新都福原　○浮雲かぬ　○頽へ　○土木つる　地を掘り家を建等、ふしん　○頽ひめんだう　なんぎ　○愁へ　○直垂　庶人の服にて生絹紗、綺好等にて作り、烏帽子をかぶる、後には武家の禮服となる　○手振風俗　○布衣　狩衣の紋なきものにして公卿の平常着用する服なり　○衣冠　くわんぶ普通參内の時の禮服にて冠を被り袍と指貫の袴を着く　○ひなびいやしい　○兆　きざしるし　○前兆　○しるく著顯　○をさまらずおちつかぬ　○茅を葺さて　○軒をだにも整へず　茅にてふきたる屋根の軒の所を、きりそろへることもなくそのまゝにしておくなり　○煙の乏しき　民のかまどから立つ煙のすくなきこと　○恨あるみつぎ物　以上は仁徳天皇の故事

○準へべくら　○方丈記當時見聞せし世の中の有様を書ける隨筆なり

一七、源頼朝論

○いはれわけ　理由、○經營をさめる　○豪家力あるもの　○暴逆暴　○押領○横領　○朝憲おきて　○朝賞の賞與　○心を得ずして　頼朝の心中を　○雙類○比　○孤にし助なく　○孤立　○容易し　○朝廷　○鎮護守護　○輦轂の下「輦轂」は天子のおひざもと、都のこと、　○上皇後白河上皇　○暗弱　○利用　○摧き　○法住寺殿後鳥羽天皇の御所　○凶惡の日い日○凶日　○詐れる　○理　○姦計わるだ　○代官代理の官職　○その心を取らん　頼朝の心を知げん　○協はふ　思ふに　○渡邊攝津にならぬ　○大藏卿泰經事に通ず　高階氏、文　○存念おもはく　○起請文文○誓書

一八、母のもとにおくる

○首肯ね　○餘外　○院宣法皇の勅　○驕り　○常のからだに　○復常もどる○快復　○頓に　○怪しからぬ　○行水　○起つ　○御歌友母の歌を以て交際せる人　○習はぬ經「門前の小僧習はぬ經をよむ」の俚諺　○たらちね親　○まどゐたりあふここと○團欒　○去年一の大意は、わが母上さまざまなせし瀧原夫婦と酒をくめば、去年共にあそびし時の心地がする　○鴛　○大　○三木八と號す　○古狂生　○追悼善○　○銀封奠香　○午睡れ　○裾懸ためすそにかけこしのひえるを避くるもの　○小夜著地るきれ　○神邊先生　○先君子父亡　○立誓立てる　○出精強勉　○不朽傳はる　○斯文界學　○相應ろ○効驗あ○もちられ保存せ　○伊丹に出來る酒、山陽は鋤を好めりといふ　○頡頏山陽、又三十六峰外史と號す、日本外史、春秋謌義、山陽文集、同詩集、

日本樂府等の著あり、天保二年歿す、

一九、道徳と法律

○異常い普通でな○行爲なひ ○孟宗孝の二人 ○楯籠つて ○孤忠勤を盡す ○動と
もするとすると ○走馬燈んごう ○秩序の子らできたもの ○正しいきまりか ○宇宙世の中 ○約束 ○尊長へ ○倫理道徳といふに同じ ○人の行ふべきすぢみち、 ○延いて ○不悌長上につかへるを悌さいふ ○亀鑑らんぱう ○點檢しらべる ○觀念へ ○誤解釋をあやまる ○事物物 ○律する定め ○換言云かへろ、別のことばでいふ ○作用らき ○二者さの二つ ○道徳と法律 ○混淆別がない、區 ○維持つたも ○範圍方面 ○分業部分々々に分擔してはたらく ○傾向むき ○分別別 ○實質なるもの○内容 ○社會世の ○形式た ○覺知さとる、即かくするのが自分のつとめであるさ ○強行はせる、自分がいやであつてもむりに權力でさせる ○痛切て適切 ○的確たしかなる ○制裁あつかふ ○本能らの性質

○桐生政治悠々と號す、東京法科大學を出で現に新聞記者を職とす

二〇、白峯の陵

崇徳天皇の御陵なり

○相阪の關守東、近江國にあり、この關を境として東を關西を關守は關を守る役人 ○許され阪を越して以來 ○見すごし見すてがたく ○鳴海潟千鳥の名所として聞ゆ 尾張國愛知郡にあり、 ○浮嶋が原駿河國駿東郡 ○清見が關こゝに關所あり ○大磯、小磯國 ○むらさき匂ふ武藏野の原武藏野はむらさき草、菫の名所なりけり ○象潟利羽後由 ○蜑が苫屋蜑は海邊にある漁夫苫屋は苫草

にて葺きたる小さき家、漁師村のこと　○佐野 上野國安蘇郡　○心のとゞまらぬ方ぞなき 心の留まらぬ事なく何れも面白し　○歌枕見まほし 歌の材料を得んとて、歌枕は名所といふ程の意　○葭がちる 難波の枕詞　○笻　○そぼ降る しよぼしよぼ降る　○兒が嶽　○おぼつかなき 心細き　○うばら(いばら) 荊棘　○かづら 葛蔓　○うらがなしき 「うら」は心のこと、心にかなしく感ずるなり　○かきくらまされ 暗涙にむせぶ　○紫宸、清涼 共に宮中の御殿の名　○百のつかさ 人人 ○百官と多くの役人　○藐姑射の山 仙人の住む山をいふ、上皇の御所を仙洞御所といふ故、なぞらへて上皇の御事をいふ　○玉の林 立派の御所の意、ほめていふことば　○しめさせ給ひしを 仙洞御所(法皇の御所)に占めてゐ給ひしものを　○思ひきやは 後文の「神がくれ給はんと」の下におきて解すべし 思ひよるべきか、思ひもよらぬの意　○麋鹿 鹿のこと　○おどろ 雜草をいふ　○神がくれ 崩ずること　○萬乘の君 (天子のこと)天子に車萬乘を有すると云ふ事孟子にあり　○宿世の業 人のこの世に生れてくる前の世にて罪を犯せるものは、この世にて種々の苦患を受くといふ佛教の説なり、宿世はさきの世、業は因縁のこと　○添ひ 前世の因縁が身に附き添ふなり　○供養 回向、とむらふ　○誦し となへる　○松山の浪云々 浪の景色は昔も今も同一なれど、御君(崇德上皇)はおかくれになってあと形もなくなっておしまひなすった(かたは形に潟をかけたり)　○牀 とこ　○衾 ふすま　○神淸み 心がにごりなくすんで來て　○骨冷ね 体も冷卸し　○物とはなしに なんとなく　○上田秋成 大坂の人、餘齋と號す、無腸公子、鶉居の別號あり、加茂眞淵の門人にして有名の國學者なり、又俳諧をよくす、文化六年歿す、年七十八

二一、人臣の道

○王土 帝國　○高名 かうみやうてがら　○迹を憫び 遺族を憫む　○きほひ 競ふ、彼是と不足をいふ　○危むる 身を危くする　○前事の轍 前に非望を抱きて身を誤りしものあれば之を手本として自ら戒める　○ありがたき すくなき、まれ　○制符 禁止の令　○宣旨 みことのり　○召し具し 引つれる　○かたらはるゝ 徒黨に引入れられる　○かけあひ 戰爭に出ること　○家子

一門　一族　○郎從家來　○節に死ぬる忠義のために　○はし端始め、　○朝家廷　○かろがろしさ　輕躁せらるゝ　○式微　大切なる　○樞機（戸のクルヽ）　假そめにも　○蔑　輕んずる　○堅き氷は、霜を履むより至る　何事も突然とあらはるゝものでない、小さい事をつゝしまぬ處から段々大きくなる　○末世季　○澆人なるを見て國を讓らんといへるを、耳のけがれなりとて耳を洗ひし潔白の人　○帝堯　○潁川　○巢父　許由と同じ頃の隱者なり　○五臟六腑　○顧みざらむ　何故に顧みることをせぬのであらう　○萬姓民　○羞づる　○謀反　○將門　○かくのみ　かくの如く　○頒たせ　○しらせめ　始ゑ取る　○蕭何、張良、韓信功臣　○高祖項羽と共に秦を亡し、後項羽と爭ひて遂に天下を○籌を帷幄の中にめぐらし　軍略を幕の中即ち陣營の內にめぐらす、　○留侯　○封ぜ　もらつた領地の名を取つて　○奥の泰衡　奥州の藤原秀衡　○直實　一谷合戰に敦盛を打つて名高き熊谷次郎直實也　○下文　軍より臣下に下す文書　○いみじき　非常の　○おれまでの心ごそなからめ　今の世は名を重んじ利を輕んずる程の心もなきをいふ　○ありし世　昔　○東國の風儀　重忠、直實の如き風俗　○公家　朝廷に事ふる家

二二、胡枝子

○尾花、葛、瞿麥、女郎花、藤袴、朝貌　○萩　○會意　二ツ以上の文字の意味を合せて作るなし如　○創字　我國に始めて作つた字　○秋風は云々　秋の風が吹き出でゝ涼しくなつたからさあ馬の轡をならべて花覩に行かう、「なめて」は「ならべて」の意　○嫩く　○爽氣な　さはやか　○沁み　○拂曉　朝早　○笋　○點々〳〵　○團々〳〵　○いひ知らぬ　いふことをしらぬ、たとへ方もなき　○しら露を云々　萩がうれ〳〵と露を含んでたわみながら葉の上の露をこぼさぬ面白さ　○詩人や歌をよむ風流な人　○業平朝臣　阿保親王の第五子、右近衛中將となる、世よんで在五中將といふ、平安初期の有名なる歌人なり、元慶四年五月薨す

○離騒に梅なき　離騒は楚の人屈原の作りし辭賦にして一に楚辭といふ、この離騒に門人及び後人の名を多く擧げたるに梅の事は更に見えざるなり、故に梅なき心ならんといへるなり　○世になく　この上もなく　○御壺には　○おもて起すほ　○な立てる（面目を施す）　○萩の戸の　萩殿の北にあり　○紫宸殿正殿　内裏の○讌り○宴　○夙く　○根こじがら　根が枯れずに年々芽を出すもの　○荳科植物　○宿根　○人煙稀なりしまぬこと　人の多くすむなしきさかえ、　○虚榮つまらぬ榮耀　○品性氣品　○さゝやくてゝ流れる　○ひとしほ　一層一倍入○一　○惹く

二三、忠度と俊成

○いづくよりか歸り來られけむ　平家一門、源氏の爲めに敗れて、都を落ち行きし後は何處よりか引かへして歸り來れるなり　○召し具して　○俊成卿　有名の歌人、元久元年十一月歿す、年九十一　○敬さ　○な開かれ候ひそ　開き給ふなかれの意、「な」は「なかれ」の意、「そ」は「ず」の意、「ひそ」は助辭　○この際　この門のそばまで　○直垂きる直垂なり　○小具足　手纏當を着ること　○體ありさま　○年來　○申しうけたまはりつきて　教を受けし後（忠度は後威に「なり」を存せずはなけれど　○敕撰　天皇の命をうけて歌を撰ぶ　○君じて　安德天皇、（平氏安德帝を奉じて西海に落ちしなり）　○さりぬべき　歌集に入れてもの差支のなき歌　○御恩を蒙り　おなさけでわが歌を其の中へ撰び入れらるゝをいふ　○草の蔭　死んだ後　○遠き御守り　死てからの世から守護する　○鎧直垂　よろひの下にきる直垂　○上らる　戰爭でいそがしくて　○忽劇い　○兵馬倥傯　○思し召し忘れぬ　歌の道を心にかけて忘れぬ　○ありがたく　神妙に　○向後　これから後　○曝さ　○今世　この世　○前途程遠し

贈二懐於雁山之暮雲一　この詩は勃海の周文德か我國に來りし時送別によみて贈りしもの、載せて和歌集にあり、雁山は支那の都より胡の國へ通ふ道にあり、意はこれから

行くさきは遙かに遠ければ再び會ふこともむつかしく、これが一生のわかれとおもへば落涙おさへがたしとなり　○優心ばせ　○敕勘天子のことが　○故郷花　○さゞなみや志賀の枕詞　○志賀の都は荒れ果てゝねるが花のみは昔のまゝに咲いて居る　○仔細致方なし

二四、風雅論

○かりそめのことした　○風雅風流　○嗜み心懸　○専有物自分一人　○幽居ひつそりすまふ　○詩歌　○鑑識ゝ　○特權其人にのみ與へられた權利　○感得感じて心に得る所あるなり　○恆に　○天地、神萬物に關する知識　○一丁字文盲の者、一字も知らぬ人　○快感愉快のかんじ　○快味美感　○刹那瞬間　○大宮人　○賤の草刈　○脊負へる　○一朶枝　○融々たり　○瞬閃短き時間　○練磨　○眞醇ほんとのさま　○骨髄　○珍書よき書　○名器つぼ、　○俗物なき者　○助成風雅の心を養ふ　○生田の森攝津國にあり　○箙矢を挿して負ふ道具　○標識しるし　○梶原景季梅花をさして戰ひに出でしは景季にあらずして景時なりしを誤りしなり　○天地の懐裏ころ　○天地さいふ大きなふところ　○自然に同化す　○普及おしひろめる　○餘裕ゆう心のゆとりありて度量ひろくこせ〳〵せぬこと　○快暢心ののびのび〳〵する　○天地の場所の意　○齷齪こせ〳〵　○吸收すひとる、自分の物にする　○容忍心に入れてかんにんする、心にゆとりなり明治八年八十三にして歿す　○蓮月尼京都の人、名を誠と稱す、二十歳ばかりの時夫に別れて尼となり　○宿かさぬ云々宿貸してくれぬのをうらみはしたものゝ、却つて其が爲めに花咲く下に露宿をして、おぼろ月夜の美しき天然の美に浴して有がたかつた、　○洒落つぱりとした心　○抛ち　○誇言ん　○尻けじいそれをよくな　○玩物喪志にして趣味の心を失ふ　○廢屋小屋、○破窓廢屋に同じ　○今戸燒産するやきもの東京市今戸町より

二五、利根の秋曉

○闊く　○醒す　○軋々〳〵と　○黎明拂曉早朝○　○川面○水面　○汜やり　○經つて　○哲人にて學者のごと　○涌き　○薔薇色　○薄紅　○迅い　○瞬く　○曙　○褪めすくなる、あ　○晃々〳〵きらせる　○神使エンジエル　○凛として　○羽搏つてはばたきをして　○茅舍ぶきの家、くさや　○柵り　○家鴨　○印け　○刮々となく聲　○朝日を粹いて水に映つる朝日の影をみだすごと　○川楊　○囀る　○掬んで　○嗽ぎ口を洗ふ

二六、讀書の選擇

○さらぬらぬ　○群書書物　○渉獵さりよむ　○徒費○濕費○空耗　○覺む　○煥發けり　○大に開　○精神がかゝる　○阻みる疲れ　○頽然ぐつたりとして　○生氣いき〳〵し　○覺醒すま　○措いておく　○自覺ずる　○審美の美　○靈光種ふしぎなる光、一は　○天才○先天的才華　○名篇章○名文　○逍遙ぶ　○大作章　○親炙親しく近よりなじむ　○趣味識ずる智識　○警醒ます　○啓發す○開發　○斬新極めて新らしい　○萬葉萬葉和歌集、平安朝以前の歌をあつめたるものにて、我國最古の歌集なり　○源語源氏物語、紫式部の作れる小說にして五十四帖あり　○巢林子號す、元祿時代の淨瑠璃作者にて古今獨歩と稱せらる　○偏狹たよる　○價値ねう　○陶汰えらびぬく、よきものは年月を經るも尙世人の賞贊を受け、あしきものは歲月と共に世に忘れらるゝをいふ　○賭し（賽して）　○蟻集るごときをいふ　○鑑賞翫する　○散佚うせる　○痴おろか　○野卑しい　○適合

よくかなふ、○敷演 ひきのばし ○讀破 よむ ○新刷 新しき出板者 ○推敲 文章をねりきたへていくたびもなほす ○沒趣味 無趣味に同じ、少しもおもしろみのなきこと ○時弊 當時の弊害 ○最好手段 いちばんのよき方法 ○佐々政一 醒雪と號す帝國大學文科の出、○鶉衣評釋 鶉衣は俳人横井也有の俳文を集めたるもの、

二七、知己難

○朋友 常に交際する同輩 ○知己 己の心をよく知れる友、○心友 ○仲達 幼にして總明、博學洽聞を以て聞ゆ、魏軍の將となりて、しばしば諸葛孔明と戰ふ ○祁山渭水の空營 敵の仲達は孔明の死後、其陣營の跡を見廻り孔明の軍略の才を認めて歎息せり ○按じ しらべて見ること ○孔明 名は亮、瑯琊の人蜀の劉玄德を助けて魏呉と鼎足の勢をなさしむ、○玄德 卑賤より身を起して遂に蜀の天下を創立す、諡を昭烈皇帝といふ、孔明の南陽に耕作せる時に孔明の大才を認めて三度までその草廬を訪問し聘請して遂に軍師としたるなり、常に曰く、予に孔明あるは魚に水あるが如しと ○著すれば 執着するなり ◎竹馬の友 竹馬にのりて遊び合ひし幼年よりの友

○同窓の友 室を同うして共に學びし友、○學友 ○同臭味 同じくせの友 ○君ならで云々 あなたでないと外に見せる人がない、君のみ梅の香のほんとの美は了解せらるゝのだ ○鍾子期 楚の人彈琴をよくす ○伯牙 楚人、鍾子期は伯牙の琴の音をほんとに聞わけたれど子期の死んでしまつた上は琴を彈じても天下に伯牙の琴を聞わける耳をもつた者がないとて、琴の糸を斷ち切つて又彈ぜなかつた ○荊軻 壯士、燕太子の母に賴まれて秦王を擊たんとして、事あらはれて殺さる ○高漸離 燕の人、筑をうつ名人にて荊軻の心友なり ○筑 琴に似たる一種の樂器 ○楊巨源 ○詩家清景在新春、柳嫩鷲黃色未レ勻、若待上林花似レ錦、出レ門皆是看レ花人 詩人のほんとに愛するのは新春の景である卽ち柳の芽が出揃はず、色もまちまちの時がいゝのだ、錦のやうに花の咲きみちたのを愛するは常人のことであつて、花の知己は詩人である ○茫洋 ひろびろとしてはてのなきかたち ○玄關 宇宙 ○逼る ○卜す うらなひ見る ○嘻笑 わらひ ○怒罵 いかりののしる ○神祕 ひみつ ○會得 さとる ○鍵なくして かぎを以て胸底をひらかなくつても心中の祕密をしるなり ○東坡 宋時代の人、姓は蘇、名は軾、東波は其の號なり、父は洵、老泉と號す、弟は轍、世に三人の父子を三蘇と稱して文名天下に揚る ○重

（き重き刑、詩を作りて罪
辟を得、黄州に配せらる　○是處青山可レ埋レ骨、他年夜雨獨傷レ神、與レ君世々爲二兄弟一、
又結二來生未了因一　この場所は山は青々として骨を埋むるにいい、いつか夜の雨の淋しき時獨り心をいたむ、どうぞ我々は再生する時又兄弟と生れてとげぬちぎりをしたい　○雙々も兩方　○未了因遂げないえん　○古往今來今まで　○生面見た人　○買生（博學強記にして詩文に通じ、文帝の世に博士となる、後梁王の太傅となる）　○屈原去來辭」等の文、尤も世に稱せらる　○孟軻（孟子の事、孔子を祖述して王道仁義を說く　○周公古の聖帝なり　○濃到（情のこまやかなること　○キケロ（狀師並に辨士として知らる、コンスルに撰ばれて衆徒を鎭む、三頭政治の結果として國外に放逐せられしが、又よびかへさる、後害にあふ　○スキピオ（キケロの心友、ポンペユスの岳父として、共にカイザルと戰ひて敗れ、ポンペユスの死後、再び亞弗利加のダプスに戰ひ、大敗して自殺す　○荊棘（いばらなどは生ひ茂りたる荒野　○漫みだに　○浮世（現世　○名刺（名譽　○魏徵　○太宗の世諫議大夫秘書監に進む、諫を上るに抗顏不撓、後鄭公に封ぜらる　○人生感二意氣一、功名誰復論（人の世は互に其の意氣（こころだて）に感ずるばかりである、功名の如きは論ずるに及ばぬ、　○吐露（ひらはす　○清福（幸福　○床を竝べる（東坡黃州の配に赴く時、弟轍と別て興ふ、其詩中「對レ床」云々故にかくいへるなり　○千古の懷（おもひ　○千古の懷しからの考

二八、光賴卿の參內

○僉議（相談、會議　○勸修寺左衞門督光賴（さゑもんのかみみつより信賴の叔父　○過分（身分に相應せぬ、　○あざやかに（立派に滯着する大禮服　○蒔繪（まきゑ）の細太刀（ほそだち）（鞘にまきゑを施したる細き太刀、細き太刀は實用にあらず、裝飾のもの　○おとなしやかなし（おとなしく、尋常　○乳母子（めのこ）（乳母の子　○巳の乳（己の乳　○腹卷（はらまき）（鎧の下に着る具足　○雜色（ざうしき）の從卒（中間以下　○自然（しぜん）の事で（何かの出來事で死ぬる場合　○前高らかに追はせ（聲高く先拂させて　○ひらめ（伏せ　○一座（第一の上座席につく　○上臈達（じやうらふだち）（三位以上の人　○末座（まつざ）の宰相（さいしやう）（宰相は參議のことにて八人あり、其八人の參議の末席のもの　○しどけなう（取りしまりなく　○色代（しきだい）くする

めいさつする　○閑々　○むずがつ　○居懸かけよりか　○ふしめにくさま　○あさましざく　○下重の尻　下重は下襲と書く、袍（うへのきぬ）の下に着るもの、下襲の背にしり下重は下襲と書く、袍（うへのきぬ）の下に着るもの、下襲の背に長く地に引きたるものあり、これを裾といふ、即「下重の尻」なり　○引き直しくろひ　○衣紋繕ひ　襟を正し　○笏　長一尺六寸廣三寸厚五分の板、五位以上の人のもつもの　○氣色ばみ　○衛府　近衛、兵衛、衛門の役所を總稱して衛府といふ　○御諚　御仰せ　○つい立ちて　つつと立ちあがる　○惡しう參つて　文字を上下におよくも振まはれたるかな　○打ち返して　文字を上下におよくも振まはれたるかな　○なぞ何故に、下の「あれほどの云々」の上におきて見るべし　○附き　名をつけ　○聞かじ　そんな惡口は聞くまい　○忍笑　忍びて小聲に笑ふなり　○去る　○仕出したるおとよ　○ざんぬるる　○小舘　こじとみ板戸の如くにして、板をはりて横にしげくさんをうちたるもの、格子の外にあてゝ風雨をよくふせぐものなり　○見參　伺候の人のふみならす板なり、ふみならして案内を請ふ　○荒海の障子　清涼殿の北の方にある戸　○有職　學問智識のすぐれたる人、ものしり　○尻後　○神樂岡　○以ての外　○顔赤くする　○勅諚　御詞　○一議見をいふこと、意　○曩祖　○勸修寺内大臣　藤原高藤の子　○三條右大臣　高藤の子定方　○聖代　世治　○德政　德ある君の政治　○有道　道義を知りわるくいふ　○御邊　○かたらはれ　非難せらるゝ　○さしもどかるゝ　くみして、なかまに加へられる　○累家の佳名　○累世の美名　先祖代々のよき名　○切部の宿　紀伊國日高郡にあり、熊野に通ずる路なり今切目と書す、清盛此處まで來りしに、京師より急使ありて俄に引かへしたり　○若干ならじ　澤山でもなからふ　○廻すべき　すごす　○灰燼　火事にてやけうせ　○相構へて　注意して　○黒戸の御所　惟方の返答なり、黒戸の御所は清涼殿の北にあり、御膳所なり　○一本御書所　式乾門の内侍所　○内侍所　鏡、御寶の一　○劍璽　寶劍と玉璽とにて共に三種の神器の一　○温明殿　紫宸殿の東方にあり、内侍所もこの殿内にあり　○夜のおとゞ　主上の御

寢殿なり　○朝餉「あさげの間」を略したるなり、朝夕の供御をめしあがる所にて清涼殿の西の方にあり　○櫛形鬼の間の壁の窓にある三日月形の穴をいふ　○女房女官　○影ろひつる影のうろのろしげしげに　○ござんなれあれの意　○異國國外　○前代未聞古から聞いたことがない　○宿業の報ひ　○許由許由の耳を洗ひし故事前に説けり　○上の衣袍　○ゆゝしくたけく　○萎れ　○平治物語平治の亂の始末より源頼朝兵を起すまでの事を記せる書なり、作者は葉室時長なりと云へど明ならず

新訂中等國語讀本卷八字引

一、宇治河の先陣　その一

○後白河院法皇　○狼藉斜ならず亂暴することゝ一方でない　○牢籠まるこゝと　○顯官、顯職官高き職　○卿相公卿　○雲客○雲のうへ人　○誼　○簸しし　○無下にに一向　○源氏義仲をいふ、　○舊臣平氏のこゝと　○ゆかしゝたゞしい　○奥ゆかしくて　○與力同心を一にす　○逆鱗天子の御いかり　○待所家人宿侍の役所なり、その長官を別當といひて諸侍を指揮し、刑罰を決するを司る、次官を所司といふ　○案の内に心配する　○あてたる　○ゆゝしさな大變　○引きぬけるとりの　○なべてすべて、ことごとく、　○亂杭川中に打　○逆茂木鹿角

の如くに荊棘の枝を以て籬を作りたるもの　○大名（だいみやう）将軍の家臣中守護地頭の領地の大なるもの　○小名（せうみやう）守護地頭の小なるもの　○黨（たう）れる武士より集高家（かうけ）き身分高き人　○佐々木（ささき）高綱　○梶原（かぢはら）景季　○生唼（いけづき）　○磨墨（するすみ）　○若白毛（わかしろげ）　○落（おと）しを走らす　逆落しに馬○かくる駈け　○引（ひ）くぞ　しりく　○自然（しぜん）の犬死（いぬじに）むだじに　○木曾殿を傾け伐する　義仲を征傍若無人（ばうじやくぶじん）傍らに人もなげ　○賜（たま）はばや　生唼を與へん　○浦冠者（かはのくわんじや）頼朝の弟範頼　○推參（すゐさん）の所望（しよまう）のぞみ　○狼藉（らうぜき）しからぬこと　○たばでもたへざらんも　賜らいでも、あ　○眞平（まつぴら）ひた　○まかり預（あづか）らむ頂戴せんの意　○落居（らくきよ）○落着（らくちやく）　○辰（たつ）八時　午前　○早參（さうさん）まゐる　朝早く　○所存ある體のある樣子　○下向（げかう）ぞりこの京都よ鎌倉に下りしか　○見參（げんさん）かゝり　○料（れう）に　○自由（じいう）命を受けず　○馳（は）せ　はしらせて　○損（そん）じいためる　○知音（ちおん）知へて　其考　○相計（あひはから）ふらひずる　賞與の計　○隨分（ずゐぶん）非常の意　○希代（きたい）めづらしい　○勝事（しようじ）れ　○賜（たま）ばざりき　○その旨を存（ぞん）ぜられよ　そのつもりよ　○そゞろかずがす　○軍（ぐんじやう）場　○心勞（しんらう）こゝろをわづらはす、心配　○神妙（しんめう）特　○朝威御威光　朝廷の

二、宇治河（うぢがは）の先陣（せんぢん）　その二

○大手（おほて）めかゝる兵　表門よりせめかゝる兵　○搦手（からめて）めかゝる兵　門よりせ　○垣楯（かいだて）楯を垣の如くならべる　○掻（か）きならべる　○河の耳　河の岸、河○分内（ぶんないぢめん）場所　○御曹子（おんざうし）部屋住の人をいふ　○雜色（ざうしき）分のびくき役人　○步（かちばし）走かひの身　○在家（ざいけ）百姓の家　○のゝしりぶ　叫　○續松（たいまつ）明　○さりともとらひはすまいと　まさかにやきは　○高櫓（たかやぐら）　○剛（がう）の者　つよくたけきもの　○注（ちう）しす　○見參（げんさん）に入るお目にかける　○勇（ゆう）をなし　勇氣を振ひ起し

○色めきけしき立つ、　○とゞめきくさわぐ　○軍將義經　○郎等來　○家子僕　○舍人　○馬具　○物具○甲冑　○瀨踏ふみはかる　○矢筈を取りくる、弓を射る時に矢の頭を弦にかく矢を取りつがひて續々と　○剛座に卽かむ剛の者の列に入る、剛の仲間に加はるをいふ　○橋桁たる橫木　○振舞は　○はらはらばたせがせる　○弓杖弓を杖につくをいふ　○小冠者る少年　○名告り　○潭々　○赤深き樣　○森々ろかたち　○瀧水　○虹の橋桁〻れる橋桁　○雁齒の榱木の段の雁の行列の如く、又齒の列べる如きつくりをなしたるをいふ　○奇しみ巧　○矢ごろ合のよき間隔　○發ち　○ゆり合はせちゞめて矢の入るすきまのなきやうにするなり　○矢閒（矢狹間）矢の飛び來る隙間　○裏掻くに通る　○事新し更にふに及ばすの意、卽事新しくいはすともあれの意　○春立つ日影春の日かげ　○細谷川の流　○その事なり用意

なしたのもこの川を渡さんが爲なり　○木蘭地しく黑赤黃色にして少し赤黃色の三　○黑革威の小札を綴る　○三枚兜枚段になり　○御邊あなた　○鎧　一段は　○二段六間　○たばかられされ　○御身、　○小中黑矢の羽の、眞中に黑き紋あるをいふ　○練鐵作　○鍬形打ちたる兜　○石打の征矢石打の羽にてはぎたる矢、石打とは鷹の尾の一種、　○嗔物造いかめしき太刀なり　○黃覆輪鞍の緣邊を黃金にて裝へるなり　○究竟この上　○逸物すぐれた馬　○さゝめかし水をさわ〳〵と音をたてゝ　○曲に渡し曲は曲尺のこと眞直に渡るなり、　○除け　○流渡急流に流されながら斜にわたる　○源平盛衰記二條天皇より安德天皇まで三十餘年間の源平盛衰の跡を記述す四十八卷あり

三、月夜逗子より友人に寄す

既望 十六日のこと　○晩餐 ゆふめし　○悠々然たり ゆつたり　○攜へ　○口碑 くちづたへ　○三浦義盛 剛勇にして射をよくす、頼朝に従ひて軍功あり、實朝の時、兵を擧げて北條氏を滅さんと謀り、事ならずして殺さる　○恩澤 おかげ　○絶壁 けはしいがけ　○斗出 つきでる　○小坪岬　○恰當 丁度よい、あつらへむき○恰好　○蒼茫 ひろびろ○茫洋　○當面 正面　○雪舟 備中の人、通稱は小田等揚、有名の畫工なり、寛正六年明に渡りて大に學ぶ所あり、永正三年二月歿す、年八十七　○淡墨畫 すみゑ　○恍惚 うつとりさされる　○突兀 つきたちそびえる　○妙義山　○聯歩快談 袂をつらねて歩みつゝたのしく談話する　○帽簷 帽の緣　○さしり上り すれ〳〵にのぼる　○相模洋　○海上に天あり云々 月、海上をてらして空が水面にうつれるさまなり、賈島の詩に「棹は穿つ波底の月、舟は壓す水中の天」又、新後拾遺集の歌に「水や空、空や水とも見えわかず、かよひてすめる秋の夜の月」とあり　○濤　○錦繡 にしきやぬいのしてあるきれ　○瀾　○玄深 おくぶかきこと○幽玄○深奧　○武衞 衛府の唐名なり、頼朝兵衛佐たりしを以ていふ　○蛇行 うねりゆく　○祠堂 やしろ　○巉巖 きつた岩　○東鑑 高倉天皇治承四年より八十餘年間の鎌倉幕府の記錄なり　○小笠懸 射的のこと　○憶う　○しのばれ出す　○經照てきた てらし　○井上梧陰 故文部大臣、明治二十七年死、　○別墅 べつさう○別業　○門を敲く たづねる○訪問　○捷路 ちかみち　○冱えわたり 澄み　○奇礁 めづらしきいは　○狂巖 おもしろき岩　○楊掛 腰掛　○庭除 にはさき　○婆娑 木の影の動くさま　○江湖の漫談 せけんばなし、よもやまのはなし　○生憎　○掠め　○三五の村舍 三軒又は五軒ちらばつた村家　○御最後川　○汀 みづぎは　○蘆洲 あしのはえたす　○黯淡 まつくろい　○零ちれる こぼれる

四、そゞろごと五篇

一、雪の朝

○人のがり許へ　○ひがひがしからむ人めく人、無風流　○くちをしきさない　○をかし興があつた　○かりしか「かりき」に同じ　○徒然草吉田兼好法師の隨筆

二、青き眼

○さしたる事なく事もなく　○むづかしろさい煩し、う　○障りかへ　○いとはしげさげ　○心づきなき氣のつかぬ　○なかなかての意　○同じ心にる心の合た友に　○つれづれくたいくつ　○阮籍七賢の一人　○青き眼阮籍がすきな人の來る時は青き眼をつくり、すかぬ人の來る時は白き眼をなせる故事、　○その事となきに之さいふ用事のなきに

三、過ごし方

○せむ方なきしやうがない　○やるせなし　○すさびなぐさみ　○具足什器　○反古物品○　○やり棄つる破り棄つる　○なき人死んだ人、亡き人　○かきすさびなぐさみにかきすてたるもの　○ある人の文だにる人の文でさへ今現にいきて居　○あはれなるる興あ

四、賤しげなる物

○調度の器具　○硯箱なり　○持佛堂佛間　○前栽には　○願文申す文　○作善文願佛に願ひ

○厨子の内、

○文車書物を入れるたなに車をつけて座敷をひきあるくに便せるもの　○塵塚のちりごみすてばのごみはいくら多くても見苦しからずさなり

五、見ぬ世の友

この下に「以上は何れも見苦しく賤しにつき、經を寫して奉るとか、金穀を供へるとか、善をなす文言の多きをいふ　○書き載せたるきものなり」の意を加へて見るべし

○見ぬ世の人　昔の世　○こよなう　此上なく　○文選　梁の昭明太子蕭の編す　六十巻あり　○あはれ　面白く興ある　○白氏文集　唐の白樂天の文集　○老子　周の老聃の著、老子道徳經とも云ふ　○南華の篇　莊子といふ書物のこと　○博士　學問ある人　○つれづれぐさ　吉田兼好法師の隨筆なり　○徒然草

五、舊都の月

○新都　攝津の國福原にて、清盛、安徳帝を京都より迎へて新に都を定めたり　○事始　開始　○遷幸　天子の御うつり　○舊き都　安徳帝の事、現作の人物也　○ゆさましかりつるを　情けない　○名所の月　色のよき所をいふ　○須磨　源氏物語に須磨明石の巻ありて光公能の男なり　○滋し　○蓬が杣　蓬の林の如く生茂りてをいふ　○浅茅が原　生ひたる原　○鳥のふしどみか　鳥のすをいふ　○紫蘭　草の一種　○近衛河原　京都近衛通りの東河原なり　○随身　朝廷より守護の爲め貴人につけたまはる護衛兵を　○伏見　山城國にあり　○廣澤　山城　○寛定　文治建久年間　○源氏の宇治の巻　源氏物語の宇治の巻に優婆塞の宮、即ち太上天皇の八の宮の、琵琶を前におきて月に對せること見えたり　○優婆塞　俗人にして佛門に入れる人をいふ　○夜もすがら　徹夜　○撥　琵琶を前におきて、撥を手まさぐりにしつゝ居たるに、雲がくれたりつる月の、俄にいとあかくさし出でたれば扇ならでも、これ（撥）しても月は招きつべかりけり」云々と見えたり　○小侍従　大僧都法印光清の女、和歌をよくす　○小夜　さは發語、夜に同じ　○今様　平安朝より行はれたる歌の一體にて四十八文字に作る　○くすなくり

わたりて、かくれたる隈もなくてらすこと　○おしかへし　くりかへす　○三反　みかへりさん　○沾らされ　涙をながす　○平家物語　平家繁昌の事より其沒落に至るまでの事蹟をおもしろく書き記したるもの、はじめ盲人をして琵琶に合せてうたはせたるもの

六、美術の保護　その一

○蒼々く　あをく　○漠々　遠く廣くかぎりなき　○睥睨む　にらむ　○窺窬　うかがふ　○懸軍萬里　遠く軍隊をひつさげて萬里の外に出ろ　○異疆　外國　○絶域　かけへだてたるところ　○家足り　家ゆたか　○人給し　人々が何不足なく　○方策　しかた　○采　ふうさい、すがたかたち　○景仰　したひあふぐ　○敬肅　うやまひつゝしむ　○謹恪　つゝしみ正しくする　○振興　さかんにふるひおこす　○閑人　ひまびと　○一要素　ひつえうなるもと　○天竺　印度　○三韓　朝鮮はもと馬韓、辨韓、辰韓の三國にわかる　○典型　てほんかた　○構造　しくみ　○倣ひ　ならひ　○同化し　その國のものとなつてしまふ　○願ふに　おもふに　○よりより　時々　○名工、

妙手　上手な　○殺伐的時代　殺氣のあらつぽい、亂暴な時代、即戰亂の時代のこと　○堅牢無雙　この上もない、かたくしつかりしたる　○鐔　つば　○目貫　刀の柄につけるかざりの金具　○精緻　細工のこまかきこと　○高妙　極めてたくみなること　○大伽藍　大きなてら　○大堂塔　大きな御堂や塔　○阿彌陀佛　淨土にまします如來　○毘盧遮那佛　大日如來　○相　かたち　○昌平　たいへい　○世態　世の有樣　○世相　○狷介　固くさつて屈せぬこと　○不羈　ものに束縛されぬこと　○超絶　ぬけいでる　○時世　時流　○人　俗人　○流俗　一般の俗　中世の中　○豪邁　心氣のたけくいさましい　○逸宕　すぐれておほきい　○飄平　ぶらりさしたる（俗事に頓着せぬ）　○天外　世俗の外　○高踏　高くふみだす、（でぬける）　○描出　えがきだす　○ミケランジエロ　彫刻、繪畫、建築を業とす、其製出する所、頗る雄偉宏大、を以て世に稱せらる　○ラフアエロ　伊太利の畫伯にして、聖母マリヤの像、羅馬府のボアテイラン宮殿の壁畫等の傑作多し、西暦一四八三年に生れ、一五二〇年に歿す　○精査　くはしくしらべる　○檢覈　よく／＼しらべる　○風潮　風のおもむき、氣風　○贅澤　おごり　○有識の士　もの

しり、見識ある人　○うたゝ　はなはだ、まことに

七、美術の保護　その二

○寧樂　奈良　○平安京　平安都　○淵叢　ものゝ多く集るところ（中心）　○木魚　讀經のさきに叩く器、　○一色異彩　いろかはつたいみどり

○雲氣　雲のこゝろ　○平泉　陸中にあり、藤原清衡以下三代の遺址なり　○寒煙　さびしきこゝろ　○荒草　あれはてたるくさ　○蕭條　さびしい

○絶調　ぬけてよきこゝろ　○計　國の寶を外國に出さぬ方法　○つらつら○熟思　つくづく　○後塵　あとにつき從ふ人　○阿堵　錢金

○冥助　暗々裡の補助　○先天　生れながら　○暗々裏　知らずしらずの間　○祠宇　やしろ、みや　○來者　これから來るもの、未來のもの

○參照　參考　○散佚　なくなる　○典型　てほん　○凱旋門　軍に勝ちたる祝の紀念門、即、ナポレオンの凱旋門をさす

○頌徳表　人の徳をほめる文、これもナポレオンの偉功を表せんために建てたるものなり　○三宅雄次郎　文學博士、雪嶺と號す、舊金澤藩士、明治十六年帝國大學を卒業し、「日本人」「日本新聞」等に主筆たり、縦々不羈の筆を以て大に世に稱せらる

八、北京の光景を報ず

○清里　一清里は五町五十四間三尺　○天津　○消息　たより（通信）　○宿次　しゆくじや　○贏け得　得ること　○帝都　首府　○

○遼、金、元、明　支那の各時代の國號　○隨時　隨の時代　○舊蹟　ふるいあと　○高麗　朝鮮　○經由　とほる　○

○痕迹　あと　○燕國　○風蕭々兮易水寒　風蕭々として易水寒しといふ、蕭々は秋風の何となくさびしき、この解釋は七巻におり　○翠黛　みどりのまゆずみ

○直隸　○萬戸　澤山の人家　○街區　まち　○瞰　伏して見る　○綠甍　青きいらか　○堂々　りつぱに　○紫禁　天子の宮

○無垠　かぎりなきこと　○塹壕　ほり　○緩急　危急の場合　○皮相　うはつら　○外觀

九、萬里の長城

○峡中ざま　○驢背のせなか　○居庸關城　○元末明初明の時代の末、

さはめてけはしい　○重疊されるる　○烽臺あげろ臺　○空を摩せるびねろ　空にそ　○駭

す　○志　○譙樓だい　○堅緻かたくてこまやか　○肉膨

○塋澤やがある　○半截切る　○陀羅尼梵語（卵の經文の題目）　○玆同じ　○基址のあさ　○翠巘山　○

扉列らぶ　○斧劈　○層出疊見あらはれること　○石筍けのこ　○攢蠻つずくにたつ

○罕に覯る　○濤聲の音　○奔湍川○急流　○流れの急な　○睹る　○寸草短き草　○石礫小石や　○

楊柳の村家　柳の植つ村ぞ　○琥ら　○山阻がけ　○傍う　○峻し　○驢蹄のひづめ　○蹬

○唐土名勝圖會　○磴階段　○厓石の岩　○九十九折れる阪道　○亘り

こゝ、　○北門鎖鑰　鎖鑰はくさりこかぎにて門の大切なる所をいふ　○平衍らか　○談山　○景致き　○頽れ　○撹うして風の勢が　○朔北方　○中原土地　○烽火し　○地に委して　地上にす　○氣宇やう　○八荒こと　○縁飾ざりをつける　○繊麗い　○崇高尊い

○凜然かたち　○内藤虎次郎帝國大學教授　京都　湖南と號す

○雑堞垣塀　○羅列つらなり　○神旺んになる　○氣昂るかんになる　○鏘びかたち

一〇、言語

○醜物舌のこと、　○須ゐ　○張儀妻之を詈しりしに張儀口を開いて我舌尚有りやと問ふ、妻即ち有りと答へしに張儀　支那戰國時代の遊説家、諸侯に遊説して學をうけて歸る　○秦王連衡の策を致せり　○蘇秦しく説客也、其若　○亘口な口　○奏王に説きて　張儀は秦王に同

き時家に贈りしに其兄嫁が織物をしてゐたが一向鍼薬をもてなさず冷遇を極めしなり　○機杼 はたなり　○俯首一番 頭を垂て考へる　○趙王殿裏 蘇秦が六國を合從して秦に當らしめむと趙王に見へて献策するをいふ　○架説 くど〳〵さきつける　○沈默 だまつてゐる　○奸者 心のねぢけたもの　○城塞で　○煦々 おだやか　○胸廓 こゝろ　○債鬼 借錢さり　○大丈夫 男兒　○孤峯 孤立の峯　○長江 ながき川　○良賈 上手な商人　○藏す 深くをさめて、多く見せぬをいふ　○斥く しりぞく　○桃李 「桃李不レ言下自成レ蹊」の詩あり、前に解せり　○蹊 小みち　○宗廟 先祖のおたまや　○瀆さ 宗廟は無言なれども、人これを敬ひてをかしけがすものなきをいふ　○幸田成行 露伴と號す、明治小說家の巨擘

一一、文學の價値

○純粹 まじりけのない、まつたく　○謬見 あやまつた考へ　○最好方便 もつともよきてだて　○方便 てだて、手段○方法　○辛く　○終局 さいごのつまり○最後　○爛漫 さきみだれる　○賞翫 ほめる　○菽麥 豆や麥　○落莫 さびしいこと　○寂○　○價値 ねうち、あたひ　○抹殺 さりのけろ、けづり去る　○野園 野原のこと　○風趣 おもむき○風致　○青盲 あきめくら　○井上哲次郎 福岡の人、明治十七年獨逸に留學し專ら哲學を研究す、歸朝後文學博士となり現に東京帝國大學文科大學長たり

一二、奥の細道

○國主 諸侯　○宮柱 みやばしら　○ふとしく 太くたくましく　○彩椽 色どれるたるき　○きらびやかする きら〳〵　○階 かいだん　○朱の玉垣 朱にて赤くぬりたる社の垣　○塵土 ちりひぢ　○俤 おもかげ、かたち、やうす　○午 日中○正午　○雄嶋　○ことふり 云ふも陳腐に屬すれども　○扶桑國 日本　○好風 よきけしき　○洞庭 支那の有名　○西湖 の湖なり　○浙江　○聳つ そびえたつ　○匍匐 はらばひ　○ため 矯正する　○窅然 深遠のさま　○美人 松島の景色に美人をたとへたるなり　○ちはや

やぶる神の枕詞　○大山づみ（大山祇）山の神　○造化の天工 自然の巧みなる細工　○雲居禪師　○座禪 佛道を修行すること　○木蔭　○松笠 まつの實○松毬　○草の庵 草ぶきの小屋　○復あらたまりぬ なり、又別段　○瑞巖寺　○眞壁平四郎 入唐後臨安の佛鑑禪師に學べり　○開山 創めて寺をたてる　○德化 德の高き敎化　○七堂 山門、佛殿、法堂、方丈、食堂、浴室、東司の七つ　○甍 棟の瓦　○平泉　○蒭蕘 草や薪を樵る者　○黃金花咲く　○傚らん　○まどしき 貧し　○袖のわたり 地名なり　○尾ぶちの牧　○まゝ 地名　○墟　○衣川　○功名一時の叢 功名てがらもたゞ一時の事にて、今は昔のあともなく、たゞ草むらさあれはてたさなり　○國破れて山河あり 一國が亡びてたゞ山河が昔のまゝに殘つて居るばかりの意　○夏草や、つはものどもが、夢のあと 夏草の茫々さ生ひ茂れるさころ、こゝが數多當年の戰士が屍を晒したさころなるか、さても榮枯は夢のやうなものなり　○光堂 本堂のこさ　○棺　○珠の扉 昔の立派なさびら　○頽廢 すたれこはれる　○空虛 あさかたもなく、空しく　○記念　○五月雨の降りのこしてや光堂 五月雨は、萬物をくちはてさせるものであるに、獨り光り堂の昔のまゝに殘れるは、之のみ降り殘したので有うか、

二三、荒野の末

○石川依平 遠江の人本居宣長の門人、柳園と號す、安政六年五月歿す　○もの丶ふの云々 武士が命を露さ輕ろんじて戰つた此荒野が原に秋風が吹くよさ秋風惡々たる故戰場を詠ぜしなり　○加納諸平 遠江の人、和歌山に住す、安政四年六月二十四日歿す　○笠置山云々 晩秋故戰場を過ぎて詠める歌なり、一首の意は、秋のくれ方、笠置山をすぐれば、空はかきくもりて、明日より降るべき時雨さへ先き立ちて、狂風ふきすさびてものすごく、當年の事さへ思ひ出さるゝさなり、笠置山は後醍醐天皇のしばしこもらせ給ひし所、山城相樂郡にあり、あすの時雨云々は、時雨は冬のもの故、今日は晩秋の事なれば、明日より降るべき時雨を、はや今日より降せての意　○飯田年平 因幡の人、大平、諸平に學ぶ、石園さ號す東京に住す、明治十九年六月二十六日歿　○こしかたは云々 過ぎて來た方を顧れば遠く霞みわたりて、こゝ春草の生ひ茂つてゐる青野が原の古戰場にはき

すの響かしてゐる、青野原は曆應元年、北畠顯家兄弟土岐頼遠、桃井直常等の兵を破りたる故戰場なり　○土岐光秋傳詳かならず　○ふき下す云々　倶利加羅山に義仲が平氏を木葉を散ずるやうに討滅して其倶利加羅下ろしの山風が吹き下して來て木の葉のちるを見るおそつとするなり、倶利加羅は壽永二年五月、木曾義仲、平維盛の大軍をこゝに擊破す、平軍木葉の如くにこの谷におち入りて死せりといふ　○山田百枝　○こゝをせと云々 こゝを先途と爭つた當年の盛衰の流と共に世に名高く傳はるとなり、佐々木高綱、梶原景季が宇治川の先陣を爭ひしこと前にあり 佐々木梶原等の武名は今の世にも

一四、文話一則

○上乘 最も上手なもの　○近松門左衞門 巢林子と號す、　○逸事 散逸した其人のおこなひ　○含蓄 その文字の上にあらはれた以外に意味をふくむ ○餘情○餘韻　○緊要 大切　○會得 こゝろ○了解　○具體的 形を以てあらはる、もの　○抽象的 物の共通した性質をぬき出して、それを綜合したるをいふ　○貧寒 まづしい　○漠然 とりとめのないこと、ばつとした　○晦暝 くらい　○瞭々 はつきりとあきらか

○歸結 最後の歸着するところ　○次第 順序　○墜る　○能文 文章の上手　○白石 新井君美、徳川時代の碩學なり　○折たく柴の記 白石の自傳　○眞率 すなほにしてかざりけなきこと　○神韻 文學の凡ならぬおもむき　○乃父 父　○蘆澤　○研鑽子　○三昧 心を一事に集注して動かず、心を靜寂にしてみだれざるを云ふ、一つに心をかたむけること　○和ぎ　○索然 少しも興味のなきかたち　○森田思軒と號す、歐米小說の飜譯を以て聞ゆ、「探偵ユーベル」「冒使者」等飜譯中好評を博せしものなり、明治卅年歿す

一五、白石と宣長

○白石 新井君美の號　○宣長 本居宣長春庵　○漢意 漢學儒者の　○多面 多くの方面にわたる　○綿密 こまかい○詳密　○敏腕 うではたらきのあること　○卓絶 ぬきんでゝゐる　○鼻祖 一番初の人○祖先　○卓見 すぐれた見識　○皇學 國學　○神道 かんながらの道、日本固有の道德　○千古不滅 千萬年の後までもほろびない　○異彩 他に異つた光彩　○峻嚴 きびしき事、秋の霜の肌をさすが如し　○濃厚

おおなしくおだやか、春の風の面にこゝろよきが如し　○廟堂（べうだう）政治を執るところ　○朝廷　○堂々（だう〳〵）大きな、さかんな　○忌諱（きゐ）はれる　○世の外（ほか）俗塵を外にする　○従容自適（しようようじてき）ゆったりとうつろ〳〵　○偉能才能（ゐのう）大きな　○學風（がくふう）學問の　○實質（じつしつ）なか　○創始（さう）人のまだ手をつけ始めない事をはじめる　○啓發（けいはつ）ものを開き　○考證（かうしよういろ〳〵）と考へ合せて、ものゝあかしをする　○既成（きせい）既に前人がこしらへた　○綜合（そうがふ）あつめる　○組織（そしき）たて　○讀史餘論（とくしよろん）十二巻、史論を收む　○東雅（とうが）二十巻、物名の語源を釋く　○東音譜（とうおんふ）一巻、文那音に對照せるもの　○前人を抜（ぬ）き古人に出ぬけること　○古事記傳（こじきでん）四十八巻、古事記の注釋なり　○玉の緒（たまのを）七巻、てにをはを釋く　○三音考（さんおんかう）漢唐吳音を論ず　○統一（とういつ）まとめる　○蕃語（ばんご）外國語　○鼻音（びおん）五十音中のザ行、ダ行の音なり　○半濁音（はんだくおん）パヒプペポの　○溷濁（こんだく）深くにごる　○清（せいげん）純む　○理想（りさう）自分で尤もよいと考へた理論上のかんがへ　○泥（でい）土屋利直（つちやとしなほ）侯父正信（ちゝ）は侯の足輕なりき　○土屋侯（つちやこう）屋敷（やしき）　○失意（しつい）不平、おもしろからぬこと　○參與（さんよ）あづかる、實永六年、家宣の將軍

軍となるや白石從ひて殿中に出仕し、祿五百石を賜ひ、事大小となく咨問に與る、正德元年朝鮮の使聘を修むるや、白石從五位下筑後守に任ぜられ、事を掌る、かくて常に家宣の顧問となり、講讀する所用ゐられざるに至れるなり　○山室山墓所（やまむろやまはかしよ）家宣長の　○感懷（かんくわい）おもひ　○優然（いうぜんたり）ゆつたり　○混亂（こんらん）の渦中（くわちう）うづの如き中　○軒輊（けんち）おもりまさり○輕重

一六、河流（かりう）

一、上流（じやうりう）

○晶（しやうめい）明れいなこと　○清冽（せいれつ）すみきよい　○涓々（けん〳〵）水のながるゝ貌　○荊棘（けいきよく）いばら　○榛莽（しんまう）はんの木や草むら　○ひびきくる松風がごう〳〵と吹く響の爲めにうち消されて、谷の水音が耳に聞えたり聞えなかつたり斷絶する　○景致（けいち）おもむき　○潺湲（せんくわん）さら〳〵と水のながるゝ音　○這般（しやはん）の　○十澗百溪（かんけい）十の谷、百の谷、　○湊注（そうちう）あつまりそゝぐ　○嵩（かさ）み　○凝縮（ぎようしゆく）こりかたまる　○

○激瀨　石につきあたる水　○奔湍　早き瀨　○浸蝕　くひこむ　○罅隙　石のわれ目　○滲入　しみ込む　○頻々　しきり

○穿鑿つ　うがつ　○脆軟　もろくやはらかい　○狹窄し　せまし　○沈澱　しづみよどむ　○堆積　うづだかくつむ　○疊湍　澤山の早瀨

○氣韻　おもむき　○酷だ　はなはだ

二、中流

○方に　○炊煙　ものを煮る煙り即ち人家をいふ　○好箇　よき　○措辭　こと　○汎濫　水のあふれること　○層々　だん／＼とかさなる

○職責　職務としてせねばならぬ責任　○衡平　平均　○中庸物　中間のもの

三、下流

○傳送　だん／＼と流しておくる　○景象　景色　○煙波掩映　もやと波とが映り合ふ　○弧形　弓形　○駘蕩　のび／＼として長閑なこと　○繡錯　ぬいとりのやうに色がまじる　○白蘋　水草　○潑剌　魚のぴち／＼をどるかたち　○縹渺　ひろ／＼　○志賀重昂　矧川と號す札幌農學校を出で文筆を以て世に稱せらる

一七、菜の花

○黒柳召波　○菜の花や、このあたりまで、大内裏　今は菜種の畑となつて居るが、王朝の古を追懷すればこの花の咲いてゐるところまで大内裏で有つたのであらう　○久村曉臺　尾張の人、俳人、寛政四年正月歿す　○桃つらつら、花つくる處、水ながし　桃の花が澤山咲いてゐる、其花の盡きるところに水が長く流れてゐるのが見らるゝ　○谷口蕪村　攝津の人、俳畫共に巧なり、天明三年歿、　○春の海、ひねもすのたり、のたり哉　春の海は一日のたり／＼と悠長にうねりくねつてゐる、ひねもすは終日のこと　○内藤丈草　尾張の人、蕉門の高弟、元祿十七年二月歿す　○おほ原や、蝶の出て舞ふ、おぼろ月　大原の里におぼろ月の出るのはよい景色で蝶も出て舞ひさうである

○各務支考　美濃の人、蕉門十哲の一人、美濃流の一派を起せり

よく澄みて、椒から稲の芽が青々と出て居るで有らうか

○ほろほろと、山吹散るか、瀧のおと　瀧がごう〳〵と鳴るひびきで山吹がちら〳〵こちろの

一八、平家雑感

一、都落

○餘燼やけの　○墨股にあり　○信越　俄に雲亂れ　木曾義仲が勢、益ふるひて、帷盛、通盛等具利加羅谷に大敗せしなどをいふ

○み吉野の　古今集の歌に「み吉野の山のあなたに宿もがな、世のうき時のかくれがにせん」とあるによれり　○いかにもならんすること　○凌辱しめ　○別路　○六波羅、池殿、西八條宅のある所なり　○譜第　先祖代々から

宿房　○一炬の煙　一度にやいて　○鳳闕　御所○　○椒房　皇妃の御殿　○夜々　○さすらふ　らん彷徨○漂泊　○直衣束帯　文官の服装　○黒金の衣　鐵のかぶとのこと　○餘哀しさ　○狂れ　○弓矢藝武　○翠華搖々　翠華は平家のよそほひのはなやかな事、搖々はしほれて　○東關　平維盛源頼朝追討の大將として東國に下るや、其勢三萬なりしが、富士川に至るときは七萬餘騎となり、即ち平家の都を落ち行くありさまなり　○渚端水　○あなたの空　都をいふ　○すみなれし　東關は關東のこと　○纜　○舳　○笛吹く人　清盛の三男左中將重盛のことなり　○敵

つ　○高山林次郎　仙臺の人、樗牛と號す、文學博士となり頗文名あり、明治世五年歿す年三十二

二、清盛入道

○案ずふ考　○耽りを傾く　一方に心　○荒ばん滅亡をいふ　○先世、後代　○梭なげひ　機に用ゐる具ともいふ

歳月の一たひ行きて再びかへらぬをいふ　○すべて　てだるに譬へたるなり　○風雅　風流、歌道のことをいふ　○一題の遺詠　引きかへして、俊成卿の門をたゝきて、詠草を取出して、勅選の集に加へられよ、これ今生の本懐なりと頼みしをいふ　○今生の本懐　この世のにありしが、都にとゞめ置きし妻子のことを思ひ、途既にふさがりて都に入るを得ず、遂に出家して熊野海に入水す、年二十七歳なり　○恩愛にほだされ　催盛、一門と共に屋島　○己身　○とこしへ遠　永　○さるにても　それにしても　○入道相國　清盛のこと　○おもしろあり　興味　○いさを　勳功　○朝家廷　○権柄　○私封地　領　○攝籙のこと　攝政關白　○成敗　掟（政治）　○こゝのこと　平家　○殿上の交をだに嫌はれし人　清盛の父忠盛をさす、忠盛鳥羽院の御願寺、得長壽院を造營せし功によりて、但馬國を賜ひ昇殿を許さる、延臣皆これを嫉み、豐明節會の夜に乗じて、やみうちにせんとはかれり、即平氏と共に殿上に立つことをいさぎよしとせられざりしなり　○禿童　清盛の間者につかへる童子十四五歳の童子三百人

を選び、髪をかぶろにきり、赤き直垂を着せて、京中に放ち、平氏をそしる者あらば、六波羅につれ來らしむ　○十善　十悪を行はぬこと、佛教にて十善を行へば天上にうまるといふ、故に天子を十善の君といふ　○外戚　母方の親戚　○八幡、賀茂の御幸　天皇譲位の後は、先づ石清水（八幡）、賀茂の高倉天皇御譲位の後嚴島に詣でんとせしなり、嚴島は清盛の尊崇の社なり　○八重の潮路　海上遠く隔れるたとへ　○ことわり道理　○不敵　暴慢　○人もなげ　傍若無人　○ゆゝし　忌々しい、甚だしい　○射山　豌姑射の山は支那にて仙人の住めりと云ふ想像の山、之を太上皇の御所なる仙洞を稱し奉るの譬なり　○重代の帝座京都　代々の都、○愛宕の里のあはれ　建禮門院の出家し給ひて、愛宕の奥、大原の里に世を忍ばせ給ひしをいふ　○なかなかにしかしながら　さうはいふものゝ、○咲きも殘らず　櫻花の滿開なるをいふ、即平家くともゝに永久にあるべからず　○東關急を傳へて　平氏が關東より起りて攻めのぼるをいふ　○競はず　振はず　○連錢蘆毛　蘆毛の馬に淡濃の灰色の圓き斑あるもの　○金覆輪にてかざ（盛な ちすゝ）　○萌黄匂の鎧ごしたるよろひ

なげ　○容儀(ようぎ)たすが　○帶佩(たいはい)刀をさせる　○佩刀さま　○富士川(ふじかは)の水鳥(みづとり)源平富士川を隔てゝ對陣せしに、夜雁の亂れて飛び立ちければ、平軍、敵の襲來せりと思ひ、一戰にも及ばず　○北土(ほくど)木曾義仲北陸道より起る　○木曾(きそ)の山氣仲義　○算(さん)を亂(みだ)しおびたゞしくて空しく都ににげ上りたり　○兩山(りやうざん)延曆寺と園城寺　○衆徒(しゆと)坊の兵　○憶(おも)ひ　○命の際(きは)にぎはしきは○い　○つらかりし無情な　○帝座(ていざ)を驚かし天子の御位を動かす　○擁(よう)しねる(ひき)　○幽閉(いうへい)めるおしこ　○非道(ひだう)人臣の道にはづれる　○小松(こまつ)の內府(だいふ)清盛の子重盛卿　○乃父(だいふ)其父清盛　○さづな(ほだし)(絆)　○歸依(きえ)信　○入道(にふだう)二位以上の佛道に歸依したるといふ　○煩惱(ぼんなう)佛教の語、人世の慾情苦慮等の煩惱しく惱ましきを云ふ、悟の反對なり　○絆(きづな)らひ　○大事(だいじ)のきは臨終　○名利名聞利慾の心　○淨樂(じやうらく)極樂淨土　○欣求(ごんぐ)願ふ　○今(いま)は臨終　○孝養(けうやう)供養　○執(しふちやく)著でも思ふこゝろ　○三世の因果(いんぐわ)過去現在未來の三世の因果應報　○怨敵(をんてきかたき)　○眇軀(べうく)小さき身　○浮塵(ふぢんうかべ)ろちり

一九、海と日本文學　その一

○繁華殷富(はんくわいんぷ)に富(さかん)む　○稠密(ちうみつ)　○一家人(いつけ)　○八方(はつぱう)東、西、南、北、東南、西南、西北、東北を八方といふ、これに天地を加へて十分といふ　○千尋(ちひろ)　○海原(うなはら)海上の景歌の　○浪の果(はて)　○敕撰(ちよくせん)の歌集(かしふ)天子の命によりて撰定せる　○合(しげくこみ)ふ　○呑舟(どんしう)舟を呑む位の大魚　○嘯(うそぶ)く歌ふ　○竹取物語(たけとりものがたり)日本最古の小說、著者不明、かぐや姬を中心として數多の人々の失戀を描ける小說なり　○源氏物語(げんじものがたり)紫式部の著、光源氏の一代の榮花と其後の事を叙し、我國文學空前の大傑作と稱せらる、須磨の卷に海嘯の恐ろしさを述べたる一章あり　○考(かんがへ)へ　○屬目(しよくもく)目つけろ、注意す　○謠曲(えうきよく)今存するもの內外二百番にのぼる　○注目(ちうもく)目を　○捻り出し(ひねいだ)出す　○織田信長時代小野小通に始ろ三味線の發達と共に益々盛んに流行す　○海神(かいじん)海の神、○わだつみの神　○龍王(りうわう)海底なる龍宮の王

二〇、海と日本文學　その二

○偏僻かたよる　○眼孔こまな　○判斷みわけ　○中正ゞしい　○拔俑拙劣がおとる　○德川氏して大船を造ることを禁ぜり、これより我國人の海外に航することを得ずなれり　○驛傳物の輸送の法にして驛に馬を備へ置き、急用ある時は驛々に乘り換へて疾驅するなり　○輕視かろく見る、おもんじない　○指を海事に染めずに手を海上のことな　○參覲交替德川幕府の時、諸大名制馭の策として、諸侯の邸宅、妻子を江戸におかしめ、期を定めて江戸に上り在勤せしめしなり　○舟子　○志州志摩國　○豆州伊豆國　○難關な所　○中國道　○讚州讚岐　○海坊主漆の如く人に似て大に、總身海上にあらはるる化物なり　○船幽靈上に出沒するの迷信なり　○巢窟か　○壺中の天地小さき處所　○桓武帝都を山城國葛野郡宇陀村に定む、今の京都これなり　○大和の地奈良のこと、元明天皇桓武天皇延曆十三年、平城天皇大同三年に都を定む

二一、海と日本文學　その三

○相承つぐ　○篇什章文　○遣唐使支那へ遣はす使節　○萬葉集日本最古の歌集、橘諸兄の編、全部廿卷　○古今集我國最古の勅撰の最初なり　○載籍書物　○拋ち之等の詔を奉じて撰みしもの二十卷あり、三卷あり　○日本書紀漢文の編年史なり、三十卷あり舍人親王之を撰す　○萎縮的ちゞむ　○因原因　○壓迫つけおさへる　○拙儒ひきよう、おくびやう、　○歌客うたをよむひと　○文人家文章記、日本書紀　○呑海ごの元氣　○雲煙去來變遷するこさ　○記紀古事記は

二二、熊野落

○大塔宮二品親王後醍醐天皇の皇子護良親王　○般若寺奈良の北方にあり　○主上天皇の御事　○囚れ　○虎の尾を履むこさへ恐るべき事のたとへ　○戰々競々　○薄り　○長夜に迷へるし、暗路を辿るこいふが如く安き心なきをいふ　○鶉の

ここくさばら　○御涙を爭ひ〻　鶉の棲む叢に葉末の露のこぼるゝ如く御涙をたれ玉ふをいふ　○孤村の辻里の辻　○彳みち

ぞま　○何處　○候人るゝもの　○門跡に仕ふる　○好專　○透閒　○紛れてらし出るなり　混雜に乘じまぎ　○おし

屠脫がせ　おしは接頭語、屠を脫がせ給ふこと　○期塲合　○もしや　若し逃れ得るやと　○思し召し反しほして　考へな

佛殿置せるところ　○大般若　○唐櫃　四本の脚をつけて唐風につくりたる櫃　○蓋　○隱形の咒　身を隱す祈禱　○

兵がし出して　○敵の兵がざつはもの　○おゝにこそ　親王がこゝにおはせりと　ふをまち給ふさなり　○淺かるべし　想像も及ばぬ　○これ體

の物もの　○底を飜し　○開け　○案の如く　思つた如く　○覺束なし　不安心なり　○玄弊三

藏律藏論藏なり、大般若は即ち玄藏の譯したる經なればなり　○柿の衣山伏のきるもの　○笈を

巡禮者、山伏など　○頭巾ぶるもの　○眉半にせめ　眉の半分かくれるまでつめてかぶるなり　○先達修驗者の

掛けざの着ける衣

頭　○龍樓、鳳闕殿、宮殿　○長らせ　○華軒香車　貴人の乘らるゝ車　○單皮と○襪子　皮足袋のこと　○脚巾

脚絆のこと○屐衣　○草鞋　○草臥たる　疲れたる　○奉幣神前に幣帛をさしあげる、（奉納）　○宿々　○路次　みち○

○道者修驗者　○山伏○　○由良　地名、紀州日高郡　○澳漕ぐ　○檝をたゆ　「檝を」の「を」は「緒」なり、かぢの緒が切れて、行方の定めなきにいふ、新古今集の歌に「由良の戸を渡る船人かぢをたえ行方もしらぬこひの路かな」とあり　○濱ゆふ　（濱木綿）草の名、葉のいくへともなく繁るもの故、「幾重」のかけことばに用ゐしなり　○

紀伊路　○藤代　○和歌、吹上　州海草郡　○瑩ける　○玉津嶋　浦にある地名、和歌の神社　○さらでだに　それでなくてさへも、即、普通の旅行でさへもの意　○曲浦　海灣、長き路をいふ　○長汀　○切目の王子　地名、日高郡切目　○伊弉諾、伊弉册　○應作　垂跡のこと（うまれかはり）　○叢祠　草村の中のやしろ　○かたしき　衣の袖を敷くこと　○村王子　○苗裔孫　○朝日　天子のこと　○浮雲　朝敵のこと　○冥闇　○玄鑒　神の照覽　○丹誠無二　ら

びなきまごゝろ　○感應し○靈驗　○御窟屈勞　○御目睡されむる　○髻結ひたる髮を兩方へ分けてわがれて下げたる結方　○三山に那智、新宮、本宮、共に權現社の所在地　○十津河　○道指南ない　○枕を敲て頭を枕に托するを示ふ、れること　○空翠氣　○青壁き青き絶壁、　○碧潭あを〳〵と　○嶮難なんじよ　○太平記圖

ぞ皇の文保二年より後村上天皇の正平二十六年に至る、十餘年間の戰亂をしるす、小島法師の作と云へり

一二三、花の譜

一、梅

○荒磯の隈いそのすみ　○歪み　○衡門二本の柱をたて、笠木を横にわたして作れる門　○いぶせく　○を　○あらき涙の　○かしき趣があるなもしろい、　○俗を易ふるにずる俗なかへて雅ふ　○出師の表表を讀みて涙を墮さざるもの

二、雪

○紫陽花　○雪と如く　○偏り　○道に進み道義心の修養成り

三、芙蕖

○巖桂　○瑞香　○薔薇　○海棠　○牡丹　○芍藥　○媚き　○押る〳〵を許さざるきこと　○儻なく　○霧　○霧立ち罩むる　○あこがれしむ　○一しきり一さかり　○漣小波　○枯び果て　○茄蓮の○赭く　○蜂の巢なせる蓮の實のこと　○趣なからず趣味のない

四、厚朴

○朴 ○塵寰世○うきよ ○嘯さゝ、詩なご吟ずる樣にこの意なり ○壓されず ○白壁珠 ○白き ○眼ざましなり 立派 ○心にある蕊 ○花の中心 ○差ひ ○面影ち ○かうがうしく〳〵神々しだか ○たゞ人人 ○凡い ○武帝漢の孝武帝、大略あり、四方を討伐して功を收む ○太閤は豐臣秀吉、こゝにて ○、石竹

○瞿麥 ○優し ○獨言たしむ ○歌心ご歌をよまん思ふ心

二四、筍あらそひ

主人公(シテ)に對する人物の甲 ○某 ○さいての音便 ○初アト ○重寶樽 ○參る程に、これぢや

○總じて ○何時 ○取らしますりに ○シテのこと 主人公 ○結はせ ○なせに取る「何故に取るか」と ○何と仰せら ○何とゐ、なりますか ○なかなか謠曲、狂言にて用ゐる詞にて「左樣」又は「然り」の意 ○わごりよなた 汝、こ ○構やるな ○かまひなさるな ○身共 私 ○お主へ ○て風をすいと是非 ○目に物見せう 痛い目に會はすぞ ○だてるの意 ○おりないらぬ ○出合へこ 皆 ○後アト 主人公(シテ)に對する人物の乙 ○待たしめれよ 待たれ ○なうなう〳〵これ ○出さしました 來合 ○あれがのがふのが 彼方のい、 ○頼むことてはない 汝をたのみはせぬ ○さゝぬぬやう 差し込ま ○律正義直 ○おこせせ よこ ○理分ち 道理 ○埒が明かぬ、きりがつかぬ ○詠まう ○あれ汝の意、われにて ○思はず知らぬせぬ 關係 ○一段ほよく ○おしやれ押してくれい ○馬屋 ○相撲力角 ○行

司勝負の判者　○お手ツ「おこて」にて手を一本まゐるなり　○遣るまいぞすやるまいぞ「にがすまいぞに同じ、狂言はみな必かやせに同じ　○狂言記諷刺の趣を演ずる樂劇なり、狂言は足利時代に發達せしもの、謡曲の眞面目なるに反し、滑稽

二五、故郷その一

○繍美しき衣　○沐猴冠者猿に冠を着せた如くふつり合でいやしきもの　○眞理誠の道理　○蘊み　○笈を負ひて笈は本箱なり　○懐た　○大宰相臣なり　○郷先生んだ教師　○ミニスター(minister)英語にては、ミニスターといふ時は大宰相さい　○故郷へかへりた　○戀ふと新教の傳道師さいふ　○改宗かへること同樣の意味を含めり　○胡ぞ　○戯言んをいふ　○焉ぞして　○與る　○さがりぬさげたまはる　○韓信漢の高祖に三臣の一人、少時辱を忍んで野人の跨下をくぐり、發達するや昔日自分に辱を與へたる惡少年の罪に赦ゆるに

儘を以てせり　○封じける　○都尉知事　○漂母川に衣を洗つてゐた老婦なり、韓信曾て漂母のめぐみを受けたる故、立身して其恩に報ひしなり　○六國の相印て六ヶ國合縦の策を立て、成功して六ヶ國の宰相となれるなり　○郊迎出迎ふ　○漢の高祖　○豐沛　○父老人　○小田原陣の北條征伐　○旋る旋凱す　○銀杏村故郷　○退休めて退く　○大統領を止る　○依然とのつばりも　○爛派　○草澤、山野かい片山里　○不世出なる　○秋風埋レ骨故郷山盡き刀折れ、如何ともする事が出來ない、たしかしうまれ故郷の秋風吹くところ、屍をうづめるはぜめてもの本懐なりとの意　○好遇らひをうける　○虐待むごいあしらひをうける　○魯孔子は魯の昌平郷に生る、然れども其本國には志を得ず、其半生を諸國遊歴の間に送れり　○遅々く　○基督　○儕　○偕に　○豫言者つて告げる人

二六、故郷 その二

○眼孔(がんこう)かたみ　○近隣(きんりん)となりき　○感觸(かんしょく)感情に觸れる　○客觀(かくかんてき)自己を離れて存する事物　○客舍(かくしゃ)幷州

已(すでに)に霜(さう)、歸心(きしん)日夜咸陽(かんやう)を思(おもふ)、無(はしなく)端更(さらに)渡(さうかんの)桑乾(みづをわたりて)、却(かへつて)望(いしうを)幷州是故郷(のぞめばこれてまやう)、舍に居る

ことに已に十年である、郷里に歸りたくて日夜故郷なる咸陽を思ふて居つた處が、今回端なく更に桑水や乾水を渡り、並州を出たところ夫より却つて客たりし並州をのぞみ見れば、却つて故郷の感がする

○愛郷(あいきやう)の念(ねん)たふ心　○故郷(こきやう)をし　○神聖(しんせい)念に浮(うか)されぬ　○聯感(れんかん)一つの事より他の事を聯想(れんさう)思ひ出す感じ　○茫々(ばう〳〵)ひろびろ　○馳驅(ちくよしり)まる　○碧血(へきけつ)赤き血汐　○勃々(ぼつ〳〵)さかんに　○恍然(くわうぜん)うつとり　○白熊(しろぐま)熊の如き猛獸の棲む恐ろしき地　○傲(おご)す

○混々(こん〳〵)もやく〳〵　○怪霧(くわいむ)ロンドンは年中霧を以てさせる〻を以て有名なり　○インスピレーション(Inspiration)

○活歴史(くわつれきし)活きた歴史　○千絲(せんし)、萬縷(ばんる)たくさんの糸の如き　○濃(こまやか)　○想念(さうねん)おもひ、かんがへ　○詞宗(ししう)文豪

○告別(こくべつ)いとまごひ、わかれのことば　○漂(ただよ)ひ　○波瀾(はらん)みなぎる

○兒女(じぢよ)の情(じやう)感慨の方面の發動　○熱腸(ねつちやう)あつき感情

○五丈原(ごぢやうげんとう)蜀の地名、諸葛亮こゝに魏の司馬仲達と對陣十二年に亘れり　○

南陽(なんやう)の舊草廬(きうさうろ)南陽は諸葛亮、即ち孔明の郷里、草廬は草葺の小さき家也　○遊子(いうし)故郷を出て旅行する者　○田夫野人(でんぷやじん)の人々　○

○望郷(ばうきやう)故郷をのぞむ　○鼾聲(かんせい)駒々(いびき)の音　○綠秧(りよくわう)稻の苗の綠なるところ　○耕耕(こうかう)夫婦して耕作する　○飄然(へうぜんふら〳〵)

悚然(しようぜん)ぞつとする　○佇立(ちよりつ)すむ　○明星(みやうじやう)宵に出るつき光りの星　○精金(せいきん)尤もよき金　○天の原(はら)云々(天上を仰ぎ見れば、我故郷の春日なる三笠の山に出でし同じ月が、同じ光を放つてゐるが、何千里と故郷に隔絶せる羈旅の客であるかと思へば感慨無量なり)　○春日(かすが)奈良にあり　○千(せん)秋の下(もと)千年の年までも　○悽然(せいぜん)いたましむる　○能因法師(のういんはふし)者(しやりう)流ゐて「秋風ぞ吹く白川の關」云々の歌をよみて白川の關を宛も超えた如くいひふらしたるをいふ　○琴線(きんせん)ことの糸、こゝろ　○妙音(めうおん)美妙な音　○德富猪一郎(とくとみゐちらう)蘇峯と號す、志賀矧川(しがしきせん)、陸南(りくなん)翁

巻八

と共に明治三大
詩文家の稱あり

新訂中等國語讀本巻八字引終

二七六

新訂中等國語讀本巻九字引

一、國民の抱負抱負は志を懷抱することゝ

○太古大昔　○漠然めなきこと　○史筆以來歴史ありて以來○有史以來　○滔々なこと　○朝宗そゝぎ入

○猶太人　○希臘ギリシヤ（ア）（ー）ス　○傳播傳へ廣むる　○天職生れながら其身に自然そなはりたるつとめ　○羅馬ローマ　○蠻夷えびす

○襲撃おそひうつ　○剝奪はくだつうばひとること　○掌握手に握ること　○寄與あたへる○貢獻　○廣布ひろめしく　○

○斷然たえまなく　○斬新極めて新しきをいふ（趣向の新らしきこと）　○鼓舞ろびおこす　○衰頽すたれる　○狀態あさま

○潤澤うるほひ、かざる　○燒點心中　○風靡したがへ　○驚天動地天を驚かし地を動かす様な大事業　○

○瞠若(だうじやく)　驚きて目を見はるさま、あつけにとられたるをいふ　○旗幟(きし)　はた、のぼり　○呆然(ばうぜん)　ぼんやり、あつけにとられたるさま　○餘波(よは)　影響に同じ　○亘る(わた)　○一刹那(いつせつな)　ごくわづかな間○瞬間　○吹聽(ふいちやう)　いひひろめる　○私に(ひそか)　○蠢動(しゆんどう)　ぐづ〳〵うごく、うごめく　○埃及(エジプト)　○攪破(かくは)　かきみだす　○發顯(はつけん)　ひらきあらはす　○括約(くわつやく)　しめくゝる　○西漸(せいぜん)　追々に西にうつること　○睹る(み)

二、國民(こくみん)の抱負(はうふ)　その二

○識者(しきしや)　物事をよくわきまへたる人、智識ある人　○先覺(せんかく)　學問又は知識ある先輩○先進　○宣傳(せんでん)　のべつたへる　○悟了(ごれう)　さとり知る　○堰(せき)　○一日千秋(いちにちせんしう)の思(おもひ)　一日を千年も待つやうな思ひ　○指導者(しだうしや)　みちびきをなすもの　○思惟(しゐ)　思ひかんがへる　○權謀(けんぼう)　はかりごと○策略　○術數(じゆつすう)　たくみ、はかりごと　○一視同仁(いつしどうじん)　人に對するに甲乙の區別なく、公平に仁愛を以て接するをいふ　○橫道(わうだう)　あしき道　○勦誅(さうちゆう)　ころしつくす　○鎖港(さこう)　港内に外國船の入るを禁じ通商をなさゞるをいふ　○攘夷(じやうい)　外國人を追ひはらふこと　○陋見(ろうけん)　間違つた考　○駸々(しん〳〵)　盛にすゝむありさま　○修練(しうれん)　をさめきたへる○鍛錬　○狂奔(きやうほん)　熱心に奔走すること　○拋つ(なげう)　○土芥(どかい)も啻(たゞ)ならざる　土や芥の如く何とも思はぬ　○輕卒(けいそつ)　かるはずみ　○擧動(きよどう)　ふるまひ　○身(み)を殺(ころ)して仁(じん)を爲(な)す　一身を仁義のためになげうつをいふ　○敏速(びんそく)　すばしこくはやい　○

○沸騰(ふつとう)　水のわきあがることにて、事に熱中するをいふ　○師表(しへう)　てほん○模範　○氾濫(はんらん)　はびこりひろがる　○排除(はいぢよ)　ひらきのぞく　○絶海(ぜつかい)　[illegible]わたる、四方海にとりまけるをいふ　○超越(てうえつ)　ぬきでゝゐる　○掃蕩(さうたう)　はらいつくす　○扶持(ふぢ)　たすけすくふ　○誘掖(いうえき)　みちびきたすける　○驕慢(けうまん)　おごりたかぶる　○掣肘(せいちう)　ためをさへる　○壓倒(あつたう)　をさへつける　○根絶(こんぜつ)　ねだやしする　○化身(くわしん)　なりかはつた身○權現　○警醒(けいせい)　いましめさます

三、丹波少將(たんばせうしやう)

○治承(ぢしよう)　高倉天皇の御代の年號　○成經(なりつね)　藤原成親の子、治承元年父の事に關し俊寛と共に鬼界島に流さる　○平康頼入道(たひらのやすよりにふだう)　藤原成朝の子平判官と稱す

○鹿瀬の荘　○わたりたる　居られ　○有木の別所　別所は別荘に同じ、成親は　こゝにてころされたるなり　○舊りたるふ
くなつた　○すさびさみ　○かたみ念紀　○信俊成親の従者、北の方の文を　持ちてこゝに來りしなり　○三尊彌陀、勢至、
○來迎り迎ふをいふ　佛の出現にて來　○便　○九品往生極樂にゆきて　生まれること　○欣求淨土淨土を願ひ求むるをいふ　○一
簇　○かひがひしくたのもしい　○遠き御守　こゝをいふ　○憂き身　○在りが
たく　○さすがしながら　○まさしくかに　○この世に渡らせ　この世に居らるゝ
○存生る○在世　○生を隔てたる　おのよと、この世と　○山荘別荘、しも　○すあま殿濱洲
殿　○築地れかき、　○おほひ屋根　○秋の山名所　○紫鴛ごり　○白鷗め　○逍遙
恐らくゝ　○欄門のある門　○蔀上をおほふもの　格子を下してその
まゝよふ　○遣戸上下のみぞにはめて　左右に開閉する戸　○とこそや

うにこゝ　御殿の四隅にありて　○折しり顔にいろいろなれ花のさくべき時節を知つた
その意　○妻戸兩方に開く戸。　顔に色々と咲きにほへども
○桃李不レ言春幾暮。畑霞無レ迹昔誰栖。桃李は幾春を送りし事か、問へども答へず、煙霞
くなれりこなり、この詩は和漢朗詠集の管輔昭の詩なり、空しくだなびきてその昔何人のすみしか、迹もな
掩林鳥獨啼、桃李不レ言幾春暮、煙霞無レ跡昔誰栖、玉香一去雲長斷、早晩笙聲歸二故溪一」とあり

○口ずさみ　吟詠すること　○折ふしの折から　○墨染きる衣　○隈もなき　照らさぬ所
しもばかりも　○心なし　心やりなし　○尻方　○憂かりし嶋をさす　鬼界が島　○一業所感　善惡の業によりてその
報をうくることにて、こゝは同じ苦しみを共にせしことをいふ　○先世の芳縁　詠まれた　○ふるさと
の云々　久しぶりで歸つて見れば、故里の軒の板間は一面に　○つゞけける　○寶物集　七巻あり、寶のことを論じて
たり　おもつて居たほどに月も漏れないことなり　佛方を寶とすることをのべ

四、自然のあはれ

一、月と露

○をかしけれおもし　○更なりもちろん、いつでも　○心はつくめれあはれと思ふ心がつく　○時をもわかず時を限らず、　○日夜よろひろ絶えず　○沅湘げんしやう沅水、湘水の二つの河なり　○憔悴しやうじん竹林こゝろにうれへ　○稽康けいかう七賢人の一人　○山澤さんたく山や川に遊びて遊びて　○さまよひ折を定めずありくこと、ぶらつく　○逍遙

二、花と月

○隈なき晴れわたりて一點の雲なきをいふ　○見るものかは見るにがぎつたものではない　○垂れ籠めすだれをたれて其内にこもりゐる　○春のゆくへ知らぬ春のすぎ行くことさもしらぬ、即ち花のひらき、ちるをも知らぬ　○萎れしをれ　○歌の詞書歌をよみし心ばえをかくこと、歌の前がき　○まかりけるいふに同じ　○行きけろと望月十五夜の月　○満月　○又なく又こなく、此上なく、　○椎柴椎の有る　○友もがなしい友がほしい　○閨ねや

五、比良の山風

○侍り　○左近中將良經さこんちゆうじやうよしつね藤原兼實の子、建永元年薨ず、歌集を月清集さいふ　○さくらさく比良の山風云々の風に櫻花の吹き散らされて志賀の浦の波の上にたゞよふをいふ　○志賀のうら琵琶湖の志賀郡に臨める地　○搴衣きぬたころもを、　○源俊頼朝臣みなもとのしゆんよりてうしん大納言經信の子、堀河、鳥羽、崇徳の三朝につかへ才藝多し、最も和歌をよくすしいのに、今この玉川の里で衣をうつ音をきくと尚更さびしいわい　○心のほかに思ひの外、おもひがけぬ　○さつまがた沖の小嶋に

云々　八重の潮風よ、われはこの薩摩の沖の鬼界が島といふ小島に流されて居ると親につげてくれよとの意　○藤原家基　基平の子、正應二年關白となり左大臣に至る　○ゑじま　繪島は淡路の國にあり　○西行法師　本名は佐藤義清、藤原秀郷の孫、鳥羽上皇に仕へ北面の士たり、後僧となる　○こぞ　去年　○しをり　山に入るに枝を折りて道に迷はぬやうに目じるしをつけおくをいふ　○關路花　○宮内卿　後鳥羽天皇の宮女なり歌をよくす　○あふさかや木末の花を云々　逢坂山では櫻の花に嵐が吹くによつて、この關の杉むらあたりでは嵐までが霞んで見える　○ふくからに　吹くによつて　○杉むらの　杉むらがりてはへたる所　○藤原定家朝臣　俊成の子、新古今集の撰者、小倉百人一首又定家の撰ぶ所なり、著書多し、　○見わたせば花も紅葉も云々　海岸の苫ぶき小屋の秋の夕暮の景色を見ると、花もなく紅葉もなく、誠にもの淋しいことであるわい　○とまや　苫にてふきたる漁夫の家をいふ　○藤原家隆朝臣　中納言光隆の子、歌を俊成に學ぶ、後鳥羽帝の師たり、　○志賀の浦や云々　志賀の浦で曉方に月のでるのを見ると浦邊を遠ざかつて行く浪の間から氷のやふな月が出る實に寒氣のものすごき景色である　○身まかりこと　死ぬる　○皇太后宮大夫俊成　俊忠の子、幼より歌をよくし、基俊に學ぶ、元久元年薨ず、御年九十一　○まれにくる夜半云々　自分はたまに來て、夜中に松風の音をきいてさへ悲しく淋しいのに、おまへは苔の下に居て絶えず毎日聞くことで有らうがさぞ悲しいことであらう　○初瀬　○禪性法師　傳記を詳にせず　○初瀬山云々　初瀬山を夕方越えて宿を尋ねると、宿はわからないで三輪の檜の林に秋風が吹くばかりで、實に淋しく心ぼそい　○檜ばら　ひのきの林をいふ

六、壇の浦　その一

○水手　船をつかふ水夫　○かんどり　かぢとり　○楫　○射伏せられ　射ころされる　○女院　皇太后の佛門に入り給ひ、門號ある御方の稱、こゝは安德帝の御母君をさす　○二位殿　建禮門院の母　○女房　宮中の官女　○ともかくも　かれこれと　○東男　關東男子　○取り入れ　なげすてる　○しづかなる　おちついた　○練色　○そばし　は　○先帝　安德天皇　○ねびととのはらせたまふ　おとなびたまふ　○あて　上ひん、りつぱ　○ふさやか　ふさ〳〵して居ること　○御背にかけ　御髮をせなかへふりかゝれ

ろた いふ ○御氣色 ○兵 ○みもすそ河の流には 御裳裾河（五十鈴川の上流）は伊勢大神宮の前を流れてゐる河なれば天照皇大神の御子孫なる天皇の御ちすぢになれば、流の下にも都ありと今ぞ知れりとの意 ○八條殿 の名 ○國母 天皇の御母 ○建禮門院 平徳子、清盛の女、高倉帝の中宮なり ○乳母帥典侍 ○典侍 ○とゝのへ へて ○長生 長生殿は支那にありて皇城にありし殿門の名なり、下の不老門も同じ ○不老 この門も支那にあり（共に聖壽の限りなきを壽きたるよりの名） ○鱗 魚類 ○十善 天皇のこと ○萬乘 天皇のこと

○蒼海 青い海 ○有待 定めなき身、いつか死ぬべき身、即死を待つことあるなり ○誰かは、たのみあるなれども 誰とても頼みのあるべきことにあられどもの意、この書き方は「誰かたのみのあるべきかはの身なれども」といはんが如し ○清涼、紫宸 共に御殿の名 ○玉の臺 立派なご

んで ○闘戰、兵革 共に戦争のこと ○滿じ みちる ○御燒石 温石（おんじやく）とて冬季石をやきて體をあたゝむるもの ○番 人名

なけ ○馬允 ○郎等 けらい ○熊手 昔時敵をひつかけ捕ふるに用ゐたる一種の武器 ○から卷き からめまく、熊手にまきつ

ろけ ○藤重 ○御衣 御きもの ○翡翠 つやゝかな髪 ○しほたれ 衣のぬれたること ○もしやの時 萬一の場合

○唐櫃 支那風につくりたる脚のあるひつ ○もたりゐる 持って ○唐綾 唐織におりたるあや ○一襲

七、壇の浦 その二

○打物 太刀 ○矢頃 矢をいるべきほどあひ ○あだ矢 空しき矢、あたらぬ矢 ○よしなき事 つまらぬこと、いらぬこと ○あながちにて ○九郎冠者 源義經、冠者は元服して冠を着けたる壯年の稱 ○大童 頭髪をふりみだしたるをいふ ○草摺 鎧の腰部にさがりたる短き裾 ○したゝめ したくをする ○小長刀 ○僻目 まちがひ ○故太政入道 清盛 ○尻足 あとあし

○除けよ そこのけの意 ○ものものしうな めんだ ○早業 ○さしくゝりたる 船と船とをつなぎあはせたる ○弓だけ三つばかり 弓を二つつぎたるほどの距離 ○力なく ぜひなく ○面を向け難し むかひあつて、あひてになることがたし ○

安藝大領司のこと　○やは（やはか）　○私の力業　自分勝手の、人にしられぬ力業　○剛の名　強いふ名　○仔細にや及ぶべき　相談には及びません　承知したるをいふ　○錣て首をかくすもの　○つれなきさはかない、たよりない、○大臣殿　○二所人　○心う　心うき　○殊念　○など何故　なぜ、○いづち　○世に外に　○きはみり、極　○いかにもなり給ひなましたのであらう　○赤符　赤き木のしるし、平氏は赤色を用ふる例なれば符も赤きを用ひて平家の章さするなり　○渚ちぎは　○薄紅　○行列、　○蜀江の錦　蜀の國は錦の名産地なり　○玉

樓、金殿共に立派なる御殿

八、漁村　漁者のすむ村

○あま　漁夫のこと　○便なき便不　○風もたまらぬ松陰　まばらにはべたる松なり　○かりそめちよつき　○やがて　○べうく　○はかなげに　○なかなかにつて　○をかしく趣あり　○なに心地　どんなこころもち　○せましあらう　○手がらみ　○拱手　○まぼり　守るに同じ、見まもり居ること　○うまご　孫　○眞砂　○ほこらしげり顔　○待ちえ顔けがほ　○さはがしもの　○のゝしるくいふ　○籠こ　○さはいへど　前の「思ひやるだに心細し」といへるをうけたるなり　○くどつ　○かしがましくしく　○すき影　かげすかし見ゆる火かげ　○あらはく　見ゆるなり　○つゆまどろまれず　少しもねむられない　○なりはひ　生業（仕事）　○おのがじし　おのおの（めいめい）　○聲高　○海士のさへづり　漁師のなまりたることばにて、やかましくいふこと　○中島廣足　肥後の人、本居大平の門人、文久四年歿す

九、戰爭と文學

○静相的（せいさうてき）人の心のし傾　○動相（どうさう）はたらく方面　○象（しやうかたち）　○二者の關係（くわんけい）の一つの活動の關係　○複雑（ふくざつ）いる　○換言（くわんげん）へる　○因縁（いんねん）原因　○果報（くわはう）結果　○反映（はんえい）つること　○動機（どうき）事のおこり　○因果（いんぐわ）す結果となる　○佛國革命（ふつこくかくめい）ルイ十六世の在位中に起りたる大革命にして、王者貴族等を憤りて起り、遂にルイ十六世を裁判して配刑に處し政權を國會に收めたり、實に紀元千七百九十三年なり、されど朋黨の爭次いで起り、殘忍の殺戮行はれ、恐怖政治の弊頗る甚しかりしが、ナポレオン一世の出るに及びて悉く壓服せられたり　○ルソー十八世紀に於ける極端なる主生義論者なり　○唱道（しやうだう）となへ　○一導火（いちもたうくわ）一つの譫語（たんご）たは　○激昂（げきかう）はげみて意氣の　○得喪（とくさう）得失に同じ　○聯關（れんくわん）つながり　○普遍（ふへんあまねく）　○三昧（ざんまい）熱中すること　○枘鑿相容（ぜいさくあひい）れざる　枘、鑿は圓鑿にて丸くくりたる孔（アナ）なり　即丸きあなに四角の柄をはめんとするたいお　○殺伐（さつばつ）あらつぽい　○等閑視（とうかんし）なほざりに見らるゝこと）　○詩靈（しれい）文學の精神　○天馬（てんば）詩靈と同じ意なり心の變幻極りなく一種ふしぎなるはたらきをいふ　○整（ととの）するつくこむ）　○純乎（じゆんこ）全く純然　○客觀（かくくわん）的に世態人文事をいふ、即世態人情を外面より見て、作者の意見を加へずして、ありのまゝにゑがき出せる詩なり　○客觀の詩情をうつしたる詩、客觀的に外面の一切を觀察したるもの　○主觀（しゆくわん）の詩自分の感想をうつしたる詩、客觀の反對にて作者のこゝろを主とし　○抒情（じよじやう）情べる　○述懷（じゆつくわい）のべる　○實感（じつかん）實際のかんがへ　○多感（たかん）感情に富めること　○腸（ちやう）はなやかなるこゝろ（詩文の思想にとみてあること）　○哭（こく）せる　○現當（げんたう）現在と未來（當は當來の略）　○揣摩（しま）あてずるりいひあらはす　○協（かな）ふ　○好尚（かうしやう）すき　○吐露（とろ）

一〇、爲朝（ためとも）の軍議（ぐんぎ）　その一

○新院（しんゐん）崇德上皇は鳥羽帝の御子、五歳にして即位し給ひしが、鳥羽帝の寵姬美福門院、皇子體仁親王を生む、帝これを鍾愛して遂に崇德帝をして位を讓らしむ、體仁在位十五年にして崩す、是に於て崇德上皇、皇子重仁を即位せしめんとしたまひしかど、美福門院これを忌みて、上皇の弟雅仁を立つ、これを後白河天皇といふ、保元元年鳥羽上皇崩ずるや、時に關白藤原頼長ひそかに崇德上皇にすゝめ

矢を發く、源義朝、平清盛等擊ちてこれを平ぐ、これを保元の亂といふ　○齋院の御所　白河にあり、北殿と共に白河殿の中にあるなり　○左府　○春日
○大炊御門表　○平馬助忠正　平正盛の子清盛の叔父　○多田藏人大夫賴憲　○六條判官爲義
○猛勢なるべきが　源氏のこと故、軍勢も多くさかんなるべき筈なれども　○多分　大部分　○鎮西八郎爲朝　爲義の第八子義朝の弟、豊後に居りしを以て鎮西八郎と稱す　○具する　從へ　○不覺　ふかくしくじり、あやまり　○西河原表　北殿の西方の門にて西河原は加茂川の川原なり　○器量　こゝにては體格の意　○矢つぎ早　矢を射ることの最もはやきこと　○手利　上手　○弓手　弓をもつ方の手、左のこと　○肘　○馬手　馬に乗りてたづなを持つ手、右のこと
○矢束　矢の長さ(束は矢の長さをはかる名)　○不敵　心が剛い　○所を置かず　ゆづらず(まけぬ)　○傍若無人　人を人ともおもはぬ　○ふけう　不興にて勘當すること　○めのと　守り役　○總追捕使　罪人を捕へる諸國の検非違使を總轄する役
○勢も附かざるに　軍勢も未だ集まらざるに　○押しなつて　強てなる(官の許しなく私になること)　○香椎宮　○神人　神官

○ひにしる　○公能　○上卿　宮中の會議の頭　○外記　太政官所屬の記錄を司る役　○宣旨　みことのり　○宰府
○忽諸　ゆるかせ　○朝憲　朝廷のおきて　○綸言　天子の御旨　○梟惡　あしき行ひ　○狼藉　らんばう　○禁進　亂暴をとゞめ、捕へて朝廷へ進める　○執達如レ件　文章を取次ぐことかくの如しの意　○參洛　都へまゐる　○解官　官をやめる○免官　○科み　○上聞　おかみへのきこえ　○形の如く　普通の如く、あたりまへ　○三町礫

二、爲朝の軍議　その二

○目角　眼の左右のかど　○二つ切れ　めじりに二本の筋あるをいふ、英雄の相　○直垂　○八龍　○鎧　○唐綾
○威し　よろひのこざねを緒にてぬふこと　○大荒目　をどしの糸のあらきなり　○尻鞘　毛皮にて太刀の鞘に合せて袋に作り、遠行の時、刀のさやにはめるもの
○五人張の弓　五人がゝりにて弓をまげてつるを張る强弓をいふ　○鈬　矢をさめるうち釘　○三十六差　しやなぐひ(矢を入れる器)に三十六本の矢を入れる

○黒羽の矢　鷲の羽　○樊噲　漢の高祖の臣、猛勇を以て名高し　○ゆゝしかりき　勇しきこと　○張良　漢の高祖の謀臣　○吳子、孫子　共に兵法の達人　○養由　名人　○翔る　○擧り物するなり　○折角　骨を折つた　○高松殿天皇の御殿　○心にくくも候はず　頼みにするほどの大將もあらず　○眞中指して　喉のまんなかなれらひて　○射透し　射て貫く　○へろへろ矢　矢した矢　○御ゆるされ　御免を蒙りて　○駕輿丁　かき　○掌を反す　わけもなく容易なるをいふ　○荒儀し分　○疎略の人　○殿上人　ゆるされたる人　○無下にみに　○見參　お目にかゝること　○公卿以上　○承伏　其の説に從ふ　○退り　○先蹤　同じ、ためし　○似も似ぬ　合戰のことは學問上の事とは似もつかぬ別事なりとの意　○保元物語　保元元年後白河帝と崇徳上皇との御戰爭の事を記す、著者不詳

一二、元祿時代の文學　元祿は東山天皇の代十六年にして終る

○四民　人民の困苦艱難せし父祖の世を忘れて侈惰にうつりしなり、四民は士、農、工、商　○需要　一般の需めもとめ　○將軍綱吉　徳川家光の第四子三代將軍　○經義　儒教（孔子の學）の本經とする書物を經義といふ、即經書の義理なり　○聘す　禮を厚くして招く　○林家　林羅山の家筋にて幕府の教育の權力を掌る　○朱學　しゅがく　孔子の學を南宗の人朱熹の解釋せし一派の學問　○羅山　らざん　名は忠、羅山は其の號、京師の人、朱子の學を奉ず慶長十一年博士となり、剃髪して道春といふ、明暦三年正月歿す　○鳳岡　ほうこう　名は鑑、鳳岡はその號なり、鷲峰の子、享保十七年六月に歿す　○木下順庵　きのしたじゅんあん　名は貞幹、又錦里と號す、元祿十一年十二月歿す　○不偏一方にかたよらぬ　○雨森芳洲　あめのもりほうしう　名は俊良、京師の人、篤學の聞あり、寛永五年正月歿す　○新井白石　○蜜鳩巣　○祇園南海　紀州侯の儒官、名は瑜、尤も詩を善くす、寶暦元年九月歿す　○伊藤仁齋　名は維楨、京師の古學を唱ふ、寶永二年三月歿す　○孔孟孟子　孔子と孟子　○古學　孔孟の學の古意を祖述する學派　○東涯　仁齋の長男、名は長胤、東涯は其の號、元文元年歿す　○祖述　其の説を述べる　○六經　易經、書經、詩經、禮記、春秋、祖徠又讃して六經と稱す　○荻生徂徠　江戸の人、名は雙松、徂徠園と號す、享保十三年正月歿す　○攻撃　○攻擊し

春秋、禮記、春秋公羊傳、穀梁傳

○對峙(たいぢ)　相對して立つ

○太宰春臺(だざいしゆんたい)　名は純、信州の人、春臺はその號、延享四年五月歿す

○服部南郭(はつとりなんくわく)　名は元喬、尤も詩に長ず、寶暦九年六月歿す

○北村季吟(きたむらきぎん)　國學者、近江の人、拾穗軒と號す、後歌學所に補せられ再昌院法印の號を賜ふ、寶永二年六月歿す

○松永貞德(まつながていとく)　和歌俳諧に善くし有職に精し、逍遙軒と號す承應二年十一月歿す

○子孫(しそん)　季吟―湖春―季文

○戸田茂睡(こだもすゐ)　名は恭光、梨本庵と號す、和歌に長ず、寶永三年四月歿

○下河邊長流(しもかうべながる)　名は具平、大和の人、國學和歌を以て世に聞ゆ、貞享三年六月歿

○釋契沖(しやくけいちゆう)　年十一にして出家、後大坂高津の圓珠庵に住す、尤も音韻の學に通じ、兼て國學和歌を善くす、元祿十四年正月歿す

○僻說(へきせつ)　ひがんだ說

○先人未發(せんじんみはつ)　古人のまだ發明しない

○依託(いたく)　たのみ、

○造詣(ざうけい)　學業の深く至ること

○萬葉代匠記(まんえふだいしやうき)

○和字正濫抄(わじしやうらんせう)

○荷田春滿(かだあづままろ)

○附會(ふくわい)　つけくはへる、こぢつける

○闡明(せんめい)　ひらきあきらめる

○純文學(じゆんぶんがく)　眞の文學（廣く文學といへば哲學、理學、地理歷史の如き理文學をも抱括す、純文學は之等を除きて詩歌小說等の感情に訴へる純粹の文學をいふ）

○西山宗因(にしやまそういん)　梅翁又は梅花翁と號す、松永貞德の門人、天和二年三月歿

○佶屈(きつくつ)　むつかしい

○談林風(だんりんふう)

○松尾桃青(まつをたうせい)　芭蕉翁

○吟腸(ぎんちやう)　風雅の心

○幽玄(いうげん)　奥深く、意味深く

○醞藉(うんしや)　すなほでおとなしい、おだやか

○發く(あばく)　ひらく

○服部嵐雪(はつとりらんせつ)

○森川許六(もりかはきよりく)　又五老井と號す、芭蕉の門人、正德五年八月歿す

○向井去來(むかゐきよらい)　名は兼時、肥前の人、芭蕉の門に學ぶ、寶永元年九月歿す

○東花坊支考(とうくわばうしかう)

○岩田涼菟(いはたりやうと)　伊勢山田の祠官享保二年四月歿

○井原西鶴(ゐはらさいかく)　二萬堂、松壽軒の號あり、有名の小說家にして又俳人なり、元祿二年八月歿す

○浮世草紙(うきよさうし)

○法格(ほふかく)　文法

○戯曲(ぎきよく)　しばゐの脚本、淨瑠璃本、

○長足(ちやうそく)　はやきこと

○竹本義太夫(たけもとぎだいふ)　攝津の人、本名藤原博教、この流を後世に傳へて義太夫節といふ、正德四年九月歿す

○才藻(さいさう)　文章の才、思藻、

○燒點(せうてん)　中心といふに同じ

○要津(えうしん)　大切なみなと

○浮華(ふくわ)　うはきではなやか

○淫靡に趨り(いんびにはしり)　みだりがはしくなり

○輕佻(けいてう)　かろがるしい

○卑俗(ひぞく)　いやしい

○繙く(ひもとく)　よむ

○藤岡作太郎(ふぢをかさくたらう)　學博士、東京帝國大學助教授、明治四十三年正月歿す

一三、和藤内(わとうない)

○知らぬ火の 筑紫にかゝる枕詞にて、末もしらぬの緣語となせり。 ○筑紫 ○差へず ○鄭芝龍 ○李蹈天 ○韃靼 支那北方の夷狄の名 ○呉三桂 ○乳母が袖に捨て置き 乳母に預けて去りたりとなり ○天地の父母 天を父、地を母とたのむをいふ ○承引 承知する ○具しれる ○頓智 にはかの思ひつき ○憩ひ ○潯陽 ○赤壁 ○東坡 姓は蘇、名は軾、唐代の文章家なり ○配所 罪をうけて流されし地 ○かひがひしくも まめまめしく、忠實に ○たぎきも知らぬ たよる所もなき ○よすがもなき ○たぎつ波 みなぎり流るゝ水 ○末果しなき 行末の限りなく遠い ○ほうとほつ ○我をぬかし ため息をつく(我慢の氣をぬかす) ○脚骨に 足 ○なぶるよなん、 いたづらをするなら まよはすならん ○魅とば ○小豆の飯の相伴 狐は小豆飯を好めるもの故、その御馳走に預からんとなり ○攻鼓 ○攻太鼓 ○喇叭 ○ひやうひやう 太鼓などの音 ○すは そりや、さてば ○茫然やり ○どうどう 風の音 ○すさまじ すごく、おそろし

○臆せず わろびれず、びくともせぬ ○よめたりつた わか ○鉦 ○列卒 獸をかり出すもの ○嘯くる ほえ ○所爲 ○大人氣 ○一挫ぎ ○西天 天竺(印度) ○摺り ○爪磨ぐ 爪をみがく、(爪をむき出すこと) ○いかみかゝる 怒りてとびかゝる ○左手 ○右手 ○もぢつて 身をもぢる ○根(根氣) ○大童 髮をふりみだしたる ○髮膚 髮やはだえ(身體の末まで)も神より賜はりしをいふ ○五十鈴川 伊勢大神宮の前を流るゝ川、(身にゐるをいすゞにかけたり) ○納受け ○神祕 神の不思議 ○じりじり そろそろ ○わなゝき ふるへる ○尾筒 をづゝ、尾のこと ○ひるむ よわる ○天の斑駒 ○素盞嗚尊 ○うぬま きさま ○風來人 ふうらいもの ○笑壺 よろこび ○ほざくり ぬかした ○舌長し 過言をいふに同じ ○つき出し こころてんの緣語に用ゐたり ○詫言させい 禮をいはせよ ○いかな事 決して、どうあつても ○睨め ○近松門左衛門 巢林子と號す、淨瑠璃作者の泰斗にして古今獨歩と稱せらる、享保九年十一月歿す ○國性爺合戰 淨瑠璃本なり

一四、百蟲譜

○籠にくるしむ　かごにかひて苦しむべき　○荘周が夢　荘子さいふ書に見ゆ、　○託しけめ　この蝶に託してはかなさを諷したるならんさの意
○古今の序　古今和歌集の序文、（紀貫之、勅をうけて撰したる和歌の書）　○つらま　○翁祖　芭蕉翁（俳人、正風派の元祖、松尾桃青さいふ）
○さすがふものゝ　○卯月　四月　○端居めづらしき　椽がはに出て涼むが面白く思ふ　○長月　九月　○殘りい　のこゝろなり
○蚊遣焚き　蚊をおひはらふ爲めにふすべる火　○藪蚊　○七賢　支那晋の世に七人の隱者あり竹の林にて宴會せり、「竹林の七賢人」さ世に稱す
○五月晴れ　梅雨（つゆ）のはれあがりたる時　○絞る　○初蟬　○やがて死ぬけしきは見えず　あの盛んに鳴く聲をきけば、秋になりてすぐ死ぬべきものさも思はれぬ
○翁　芭蕉　○晝の梢　暑さの絶頂の意　○つくしてひし　鳴く聲のしかし聞ゆるなり　○識　○ものゝあはれなさ　○蜀魂　ほとゝぎすのこさ　○叫ぶ　○おなじ寶の名に　玉虫も、黃金虫も同じく寶の名に呼ばるれども、

○寶の名に呼ばれて　寶の玉さいふ名をもつて居るをいふ　○黃金蟲　○蜉蝣　朝に生れて夕方に死するもの故、人間のはかなきことに譬へらる、
○蓼き草　○物ずきの謗　俚諺に「蓼くふ虫もすきずき」さいふあり　○蝸牛　○ものゝるのに　ものであるのに　○雲水　天下をあるきまはる行脚の僧にたさふ　○歩　横に歩行する樣、譬に引くものなしさなり　○促織　○轡蟲　○音聲　○その木　その名の松の木にばかり鳴く虫にあらざるに　○むくつけき　氣もちのわろいいやな虫（毛虫のこさ、毛虫の中にも松虫さいふものありての意）　○一在所なかる
○後生　未來のこさ、即佛を信じて極樂往生を願ふなり　○松蟲の類　同じ名でありながら其行ふ所相反す　○蟋蟀　○つゞりさせ　なき聲、（伴なく故、衣をつゞりさせよさ寒さを教へるなり）　○われからと　これもなき聲、（自業自得さ身の上をなげく）　○蓑蟲　○ちゝよ
枕草紙（清少納言の著）に「蓑蟲いさあはれなり、鬼の産みければ親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて、親の惡しき衣ひき着せて、今秋風の吹かん折にぞ來んずる、まてよさいひて逃げて去にけるも知らず、風の音聞知りて、八月ばかりになればちちよちよさ、はかなく啼く、いみじくあはれなり」さあり

一五、蟲の聲

○行水の云々　虫の聲の面白く草むら一面になく故、行水のすてる場所がない、虫を驚かしてなく音をとめるがざんれんなりとの意　○杉山杉風　名は元雅　杉風は其號、芭蕉の門人　○がつくりと云々　秋風の寒くて蟲もがつくりと抜けるやうである　○三井寺の月　月のあまりよさに三井寺に（三井寺は近江湖畔にあり）　○菊の香や云々　この菊の花のよき香を奈良のふるき出で、見れば、線が潮を吹いた如く廣く一面に霜がふつて居る　○高桑闌更　尾張の藩士にして有名なる俳人なり　○枯蘆の云々　一日一日冬のさびしさのまさる景色なり　○易水に云々　易水は支那にありて易水を渡る時詩あり、「風蕭々秋風寒、壯士一去不亦歸」　○山本荷兮　尾張の藩士にして初め芭蕉の門に遊ふ、後破門せらる　○木枯に云々　冬の寒き風を木枯といふ、二日の月は木枯の風に吹き散されると思はるゝとなり　○あかつきや云々　曉天に起よかは蒸（ねぎ）にて冬のもの故、川に蔥の流れて來さがつよいとなり　○向井去來　蕉門十哲の一人、名は兼時、肥前の人、又落柿舍と號す　○隱々といは

一六、人生の四季

○創新　新らしい詞　○めづるこゝろ　○分外　外はれた以外に　○幽玄　○敷衍　詞の意をくづす　○新釋解釋　○不易の妙語　いつまでもかはらぬよき詞　○俚歌　俗歌　○陳腐　○對比へたゝへ　○平凡　ありふれる　○妥當　○旨味　○巧妙　よく出來てゐる　○聯想　聯したる想像　○麗しき　○喩　○寓意　ことばに意味をもたせること　○落想　着想に同じ　○著想　おもひつき　○こなた　わが國　○頓才　○皮相　○玩味　○紅顏　少年のこと　○心して　注意　○玄妙　不思議　○ソーシー　スコットランドの名族の子なり、エヂンバラの大學に學び神學を修む、二十歳にして詩名あり　○ひたすらに　主として　○長閑

○いよ〳〵いよいよ　○景物けし　○黯憺くらい（さびしきこと）　○落莫さびしい　○呑噬あらそひ鬪ふ　○纏綿つく　○錦なす 錦の如き（紅葉したる秋の山、なすは似すにて如きの意　○寂寞しい　○造化神（造化物者）　○禪定一心に考へて精神を修養するなり　○くさぐさ 種々　○描ける　○潛み匿れ　○かくろへる かくれる　○みよなくこの上もなく　○想がへ　○春秋の優劣 天智天皇、鎌足に詔して春秋何れかまさるかを定めしめたること萬葉に見ゆ、それより後世優劣をのべたる歌文多し　○媒　○愁ひ　○悲愴かなしく、いたましい　○客觀 心の外の事物を自分の對象として觀るをいふ　○泥み○拘泥 かゝはる　○無常變轉 天下の事物は皆變化して一所にとゞまることなしとの意　○無常觀 無常の觀念　○好比喩さへ よきた　○相ち　○蕭殺ものさびしい　○淅瀝 米をさぐ時の如き風の音、即ち枯れた木の葉のすれあふ音　○蕭颯ものさびしき風の音　○悚然ぞつとする　○小春日和 十月の春の如き日和をいふ　○脫々のんびり　○舒緩 ゆるやかにのんびりする　○バルンス スコツトランドの寒村に生

ろ、抒情詩として有名なり　○悅樂たのしむ　○數奇すき　○悒鬱をいふ、氣がふさぐ　○崇高 けだかく、こうごうしい　○覆載 天地　○怒號さけぶ　○歸依　○節時節　○恍惚 うつとり、みされる　○渴仰したふ　○風翼（風のこゑ）よく風のつばさ、　○畏敬やまふ　○絕望 のぞみをたつ○失望

一七、日野山の閑居

○六十　○露消えがた この世をさしのすゑの意、去るに近づきたるをいふ　○末葉 晩年のこと　○世の常ならず ありふれた世間の樣でない　○方丈 一丈四方　○土居 四方に壁の如きものを造る　○打覆 やれのこと　○つぎ目 家のあはせめ　○煩 面倒くさきこと（多くの費用）　○用途 入費　○日がくし 日おほひ　○すのこ 簀（竹の椽）　○閼伽棚 佛へたむける水をあかさいふ、手向の水桶をおく處　○落日 入日　○眉間　○帳の扉 畫像など安置したる前にあるとびらなり、帳（まくのかはりにたておく故、帳の扉といへるなり　○普賢 普薩の名

○不動の像 不動明王の像 ○皮籠 かはごつゞら ○往生要集 書名 ○抄物 ぬき書きしたもの ○箏 十三絃のこと ○蕨

○ほどろ わらびの生長してかれはとなりたるもの ○つかなみ わらにて作れるしきもの（むしろの類） ○文机 ○すびつ 炭櫃、火鉢のこと

○よすが たより ○姫垣 小さい垣 ○かけひ 筧、とゆ ○岩をたゝみ 石をつみあげる ○つま木 たきゞ ○

正木のかづら 蔓草（かづらのこと） ○觀念 佛道をかんがへ念ずる ○藤浪 藤の花 ○紫雲 めでたき雲 ○子規 ほとゝぎす

○死出の山路 子規の異名を死出のたをさといふよりかくいへり ○空蟬 現身（うつそみ）と書くべし現在の身なり ○あはれぶ あはれとおもふ（面白く見るこ

○罪障 罪ありて往生のさまたげとなるをいふ ○まめ 實、誠 ○口業 詞より起る罪業 ○禁戒 佛のいましめ（五戒あり） ○境

界 罪をつくる場合 ○跡のしら浪 吾身のはかなくたのみなきことを白浪の如しと思ひよりたるときはの意 ○岡の屋 宇治河の東岸 ○滿沙彌

○風情をぬすみ 歌のこゝろを學ぶ ○桂の風葉をならす 秋の夕 夕のこと ○潯陽 ○源都督のなが

れ 琵琶を彈して樂むをいふ ○秋風の樂 ○小童 ○つれづれしい さびしい ○岩なし 南天に似たる實を結ぶ灌木 ○ぬか

ご 零餘子、むかごに同じ ○すそわ ふもと ○田居 田のこと ○ほぐみ 稲の穗をつむこと、いなかけともいふ ○羽束師 ○

勝地は主なければ 土地の風景は別にもちぬしといふものはないから風景を賞するに遠慮はいらぬとの意、白氏文集に「勝地本來無二定主一、大山都屬二愛レ山人一」とあり ○

遠くいたる時は 遠くまで遊びに行きたく思ふ時は ○蟬丸翁 宇多帝頃の歌人、琵琶をよくす ○猿丸大夫の墓 平安朝初期の歌人 ○

[illegible]は近江國栗東山中にあるべし ○家苞 いへつとみやげ（わらづとに入れて持ち歸る） ○猿 ○眞木の島のかゞり火 山城國久世郡、宇治川の西に眞

木の島といふあり、昔はあじろを設け、かゞり火をたきて魚をとりたりといふ、こゝは螢の光を古のかゞり火かと思はるゝとの意なり ○ほろほろ 山鳥のなき聲にて、おつ

るさまにかけていへるなり ○かせぎ 鹿 ○埋火 火鉢の火 ○あからさま かりそめ、わづかの間 ○數ならぬ 普通の人 ○

○方丈記 鴨長明の著、長明は鎌倉時代の歌人、世々鴨神社の氏人なり、後剃髮して世を遁る

一九、死と永生

◎詛しぎ　◎解脫人生の苦を　◎宿罪前より作りしつみ　◎贖う　◎永生は死するも靈魂は不滅なるを　◎安心立命心を安んじ(心に苦しみ憂ふべきことなき境界)て天命に隨ふこと　◎遺れ　◎究竟◎終極　◎厭世の中を厭ふ　◎樂天◎世の反對にて世の中を樂しく思ふ　◎超絶にでぬける　◎魂魄しひ　◎鏤め　◎愈り　◎桑滄語より出づ、世の變遷のこと　◎墓標しるし　◎史蹟歴史のあと　◎蕩々なる貌　◎汨汨湯々に同じ

一九、歡樂境

◎肱を曲げ　◎條を鳴さず靜に治まりて太平なるをいふ　◎塊を壞らず穉よくうるおふこと　◎豐稔みのる

◎酷吏租稅をきびしく取り立てなどする慘酷の役人　◎賊民人民をそこなふ惡吏　◎直ぐならず　◎身を殺す仁をなす」とあり　◎臣附臣となりて隨ひ附く　◎蠻貊野蠻の國　◎連理枝をつらねる木　◎靈芝めでたき草　◎兵庫器械を納めおくら　◎理亂よく治める　◎傲り慢る　◎向へる膳食事中にも賢士の來訪あらば、食事の終るをまたず、はしを措いて直ぐに對面すること　◎結びかけたる髮をゆひかけて出家の禮なり　◎蠶飼　◎堯舜周の聖帝、我君を堯舜にするなり　◎三司太政大臣、左右大臣　◎修羅道(地獄のくるしみ)　◎番傘かさ(雨傘)　◎宵闇れの暗や　◎貸し下されのにして返へさぬこと　◎下部かひ　◎物詣まゐり　◎孝悌父母に事ふる道、佛ば兄に事ふる道　◎斷金の交　◎神主　◎氏子　◎丹精を抽んて心をこめて祈る

○和尚　○布施　○檀那 寺の信者　○讀經 お經をよむ　○方 藥をも方法　○二季 盆さ歳末　○瀧澤解 川德時代の小説家、解は其名、號を馬琴といふ、嘉永元年十一月歿す　○夢想兵衞蝴蝶物語

二〇、諷諭

一、石清水詣 山城國綴喜郡にあり、男山八幡宮なり

○仁和寺　○かち 徒歩、あるいて　○高良 武内宿禰を祭れりさいふ　○かばかりと これだけの事か（これが男山八幡宮なりさ心得たるなり）　○ゆかしかりし おくゆかしい　○ほい 本意　○先達 案内者　○あらまほしき ありたい

二、獅子狛犬 神前の前にすゑるもの

○大社　○志太り 甚な　○しる處 所領の處（自分のをさめる處）　○いざ給へ さあお越し下さい　○かいもちひ ぼたもち　○めさせむげん さしあげん　○具しもて さもなひて　○ゆゝしく 非常に　○信おこしたり 信心の念を起したり　○殿ばらさん みな　○殊勝 すぐれた事（めづらしい）　○とがめずや 氣が附かずや　○無下 けしからぬこさの意　○つとげ みや　○おとなしく おさならしく　○さかなきいたづらな わんぱくの、　○わらはべ 子ども　○奇怪 けしからぬこさ　○去に

二一、寂光院 賢禮門院の引きこもられし寺なり、京愛宕郡大原村の西南にあり

○去ぬる　○綠衣 六位の人の着る衣服　○監使 後宮（賢禮門院）の目付　○をりしり 時節を知つた風に　○怨むる うらむが如く暗く　○草のゆかり 少しの緣のある人もなくなりて　○はぐくみたてる 大切にそだてる　○冷泉大納言隆房 大宮大納言隆季の男　○北の方 奥方　○修理の大夫信隆 左京太夫信輔の男　○言問ひ申されけり おたづねなされた　○女院

建礼門院のこと、清盛の子、高倉帝の中宮となり安徳帝を産む　○露の御命（おんいのちはかなき）　○玉梓（たまはゝ）のかよろ枕辞（まくらことば）　○道さいふ詞にあらうけともれごも　○沙汰（さた）用意（いひつけ）する　○しげみ（しげさに）なにかくにかさ　○とりあつめたるの（いろ〳〵）　○浦（うら）づたひ、島（しま）づたひ　源氏におはれて西海の四國の島々へたよひし昔のここちをいふ　○さすがふもの（さうはい）、　○かくはなかりしきこともなかりしに　○うつろふがごとく　○御身（おんみ）の上如く衰へ行くかさ　○天子聖靈（てんしせうりやう）安徳天皇の已魂（ばつこん）の幽霊　○御たましひ　○成等正覺（しやうとうしやうがく）成佛の意　○一門平家一門　○頓證菩提（とんしようぼだい）して佛道を得よ　○先帝天皇　○高倉　○常事不斷（じやうじふだんつれに）　○神無月（かんなづき）　○中（なか）の五日（いつか）十五日　○楢（なら）　○もの者、何者かが　○しのぶべきぶべき（かくるべきそ）　○小鹿（をじか）鹿（小はただ鹿）　○佐（つぼね）の局　○岩根（いはね）ふみ云々　この山里へ誰が尋れて參るべきそ、楢の葉の音は鹿が通つたのでありまするに

二二、落花の雪（ゆき）　藤原俊基は大學頭種範の子、官藏人頭右中辨に至る、後醍醐帝の寵遇を蒙り、資朝と共に中興の謀に預る、事顯はれて高時に捕へらる、即本章鎌倉へ下ろことを記せるなり

○七重寶樹（しちぢうのはうじゆ）　黄金の根、紫金の莖、銀の條、瑪瑙の枝、珊瑚の葉、白玉の花、眞珠の菓のさゝのひたるだからの木　○八功德水（はつくどくすゐ）　澄淨、清冷、甘美、輕輭、潤澤、安和、除患、以上八種の功德の水　○春の花（はるのはな）　春の花の如くの意　○有界（うかい）世界　○承陽殿（しようやうでん）　漢の武帝の宮殿（こゝは後宮の義に）　○長秋宮（ちやうしうきう）　漢の馬皇后の宮殿（こゝは後宮の形容なり）　○玉樓金殿（ぎよくろうきんでん）　金玉を以てかざりし立派な御殿

○交野（たの）の河内國　○櫻（さくら）がり　花見に行くこと　○旅寢（たびね）となれば物（もの）うきに　交野の花見、或は嵐山の紅葉狩の如き面白き遊びでも旅寢となれば心苦しきものなり、況んや妻子に別れて行末知れぬ旅に出立つ身はさこそとあはれに思はるゝなり　○ちぎり（因緣）（契）　○ゆくへも知（し）らず　身の行末の何になるか知れぬ　○九重（こゝのへ）の　皇城は九天に擬して九門を備ふより九重の都さいふ　○憂（う）きをばとめぬ　闕所は行く人をとめるも

なり　○あふ阪　近江國　○袖沾れ　○うち出の濱　「うち出る」と地名とをかけたり　○潮ならぬ海　潮でない海、即湖水のこと（琵琶湖）　○うき舟　身を憂く思ふの「うき」と「浮き舟」とにかけたり　○とゞろ　馬の歩む音　○あふみ路　「逢ふ」と「近江路」にかけたり　○うねの野　世をうれふと野の地名にかく　○たづ　鶴　○もる山　時雨の洩るといふを守山の地名にいひかく　○くもりて見え分かず　くもりて見えぬといへり　鏡山といふ名の縁によりて　○夜のま　一夜の間に（あまり心配すると一夜に髪が白くなりて老ゆるといふ）　○おいその森　「老ひ」に地名をいひかく　○駐め　○不破の關屋　○わが身のをはり　「身の終り」を尾張にいひかく　○八つるぎ　やは添へていふことば、つるぎのこと（熱田神宮に草なぎの劍を祀つれり）　○なるみ潟　「潮干になる」といふを「鳴海」にいひかく　○明けぬ暮れぬ　夜が明けた、日が暮れたと（旅に日を送ること）　○とほたふみ　問ふに遠江をかけたり　○ゆふ暮　「いふ」に「夕暮」をかけたり　○池田の宿　宿は驛といふに同じ、宿場といふ、旅人の宿る所　○いばえなく　いな　○家郷の天　故郷の空　○西行法師　名高き歌人なり　○命なりけり　小夜の中山を又も越ゆべしと思はざりしに命あればこそ再び越ゆることを得たりとの意　○隙ゆく駒　日月のたつことのはやきにいふ「人生二一世間一如三白駒過レ隙耳」　○亭午　正午　○轅を敲き　車のかぢ棒をたゝく　○古もかゝるためし　光親の菊川にて誅せられし例をいふ　○きく川の　「菊川」に「ためし」を聞くといひかけたり　○龍頭鷁首の舟　龍の頭、水鳥の首をかざりつけたる舟、天子の御座船のこと　○眞葛　葛のこと、まは添へたる詞　○うら枯れ　しぼみかれること　○蔦　楓　○業平中將　在原業平志を得ずして關東に下れり　○波の關守　清見潟の關守なり　○三穗が崎　○興津　○蒲原　○上なき思　此上もなきおもひ　○浮島が原　○下り立つ田子　田に下り立つ農夫の如くの意　○足柄山　行なやむ足といふにかけたり　○こゆるぎ　波が越ゆると地名にいひかく　○いそぐ　「急ぐ」と「磯」にかけたり

新訂中等國語讀本卷九字引　終

新訂中等國語讀本卷十字引

一、明治の詔勅

凡そ臨時の大事には詔と稱へ尋常の小事には勅といふ。されば儀を整へ百官を集めて宣問するを詔となし然らざるものを勅とす、故に外國使臣に命を傳へ、改元、改錢、大赦、神社、山陵の告文、立皇后、立太子、任大臣等を詔書とし爾餘を勅旨と稱す（我公式令に據る）

一、五箇條の御誓文

○萬機の政治　○公論輿論に同じ、一般多數の議論　○經綸國家を經營す　○官武一途一般の役人も陸海の武官も公平にへだてなく　○陋習ない習慣　○公道道、正しき道　○皇基基礎　○振起ふるひおこす　○國是國を治むるに方よしと信ずる政策

二、大日本憲法發布御詔勅

○祖宗皇祖皇宗に同じ、天照大　○遺烈いさをし　○恵撫慈養めぐむ　○念ヒ　○懿徳大きな徳　○良能智識才能　○翼賛たすけ　○履踐行ふ　○循行ひ行ふ　○統治すべ治　○愆あやまり　○享有所のもの　○紛更改める　○在廷朝廷に居る

三、改訂條約實施に關する詔勅

○紀綱典章法度をいふ、　○治化治めて風俗をよくする　○施キ施し行ふ　○敦ク　○宿望の希望　○規畫ヲ尋ク十分に計畫する　○交渉ヲ累ネ幾たびもかけあふ　○締盟條約を結ぶ　○妥協協議　○追ヒ　○畢ク　○欣榮榮におもふ　○億兆一般の人民　○庶幾フ　○飭

シめる　○措置つかふ　○恵澤み　○憾不満足　○和好み

二、憲法の由來　その一

○輿論一般の○攘夷外國人なお○鎖國と交際せぬ○嘗創じめ

○先見の識者ほすものしり　○至尊天子　○大猷計畫

○危殆あぶない　○刃に鐵らずに　○仇なっけぬ（戰爭をせぬこと）　○危機（危險なる時機）

○反言をする　○忠亮まごころ　○注ぎ　○國體の遭遇ほず　○國難かれ

二、憲法の由來　その二

○使節かひ　○派遣ほす　○動作ら　○蛛ち　○徇よ　○社稷穀は五穀の神にて領

綸文（國家の意）　○破裂さける　○西鄕隆盛　○建白せる意見書　○鎭定だいらぐ　○兜手者

○唱導ちびくなへみ　○銜むる　○聖斷天皇の御判斷

四、新島守　その一

○おりさせ御位を讓られ　○春宮皇太子、ごうぐ　○この御齡にて受禪ありも後鳥羽帝も土御門帝も四歲にて御位につき給へり、この帝も亦四歲になり給ふ故　○院號のさだめ新に位を讓られし院名の評議あるなり　○家實のおとど近衞基通の子なり、お忍びかくすといへども大臣なり　○おぼしかまふること（北條氏追討の企）　○しのぶとすれど御くはだてのこと　○ひがしざまの方にても鎌倉（北條氏）　○その心づかひすべかめりき樣子である　○あづまの代官その用意すべ

○かつがつぼつ勅勅にておさがめのこと（上皇光季を召し）　○御勘じ給へども參らざりし故之を誅し給へり）　○京都の守護をいふ　關東より遣はしおかる

○いみじう　甚し　○さるべくてくくにして　かくの如　○あなれ　あるなれの略　○ものから　時も滅ぶべき時（義節到來したりと思ひながらも）　○はかなきしき　見苦　○おほやけ　官軍　○みづからしたまふことならねばの上皇親征し給ふことにはあらず、君側の逆臣ごのする事なれば、官軍さいへど防戦を試みん　○かつは　又一つには　○宿世　前世の因縁　○思ひなりてになりて　○本意　かれて心に思ふこと　○素志　○うしろめたき　うしろぐらきの意　○うしろ見えなむ　敵にうしろを見せる（見えなんは見せはしなり）　○うしろめたきうしろ見えなむなんさいふを正しとすれど古來のならひ　○横ざまの死ぬ犬死　○かたみに　互に　父子　○むねうちさわぎてて　驚き　○鳳輦　天子の御乘物（こゝは上皇をさす）　○りんこうのげんぢう　臨幸の嚴重（陛下の御親征を思案して、いふ）　○とばかりらく　しばし　○かしこくも　よく　○うち案じて　思案して考へて　○御輿　おんこしのり　○かしこまりの時は　時には　○さいふ　○軍兵をたまはせば　軍兵のみをさし向け給はば　○

おぼしめうけ　關東の討手の上ると思ひ設ける　○ことなり　特別である　○御うまごの取りの公經は御孫を關東に遣はしたる緣故ばいふもさらなり　○引かせて　○はらから　同胞（兄弟）　○北の方　奥方　○さしいらへ　答返　○輕き事　輕卒な企　○御ゆかり　緣故　○上達部　○殿上人　○御修法　朝敵降伏の祈禱　○顯ず　○調教　天台宗や眞言宗　○つかうまつる　御祈禱を一心にする　○ねんぜさせ　念じさせにて祈らせ給ふこと　○日吉の社　近江國比叡山の麓にあり　○御念誦　御祈　○おびえのがり　驚く　○たゞまゐり　一生懸命　○わたりおはしまして　御臨幸ありて　○御輿　神靈が人にかゝりて託宣　神意を傳へること　○御方人　○物に似ず　○過ぎにしかた　過ぎ去りしこと（神輿を防がせしこと）　今更後悔せられて　○怠り

身のあやまり　○かしこまり　御わび　○謝罪　○責一人に　一人は天子のこと、其責任は天子に歸す　○あかてい　御心に滿足せずいや〳〵ながら

○ものしたまはねど　言ひ給はざ　○世のいと心やましき　世の中の甚だ面白からぬ　○まじらひたまはざめり　中院は此度の騒動に加は り給はらざる樣子である　○おなじ御心にて　後鳥羽院と御同意にて

五、新島守　その二

○龍馬馬　○あやしくなやめり　非常に困難せり　○ひびきのゝしる　騒動する　○まねびがたしこれをすること　○世界　ろの意　○誠のきは　其の場合　○みかた　官軍　○たか潮　高き波、大波　○みだれ入りするなり　都に亂入　○物にぞあたり　あわてさわぎて物につきあたること　○保元のためし　保元の亂に崇德上皇を　○女院　上皇の御母七條院、御妻修明門院、修明門院　○宮々　御子雅成親王、頼仁親王　○網代車　あじろにあみたる車

○あやしげ　粗末　○今日をかぎり　御ありき　都にゐ給ふも今日限りの御有樣　○ものにもがなや　昔の御代に恢復したき　○御ぐし　御髪を落すにはまだ早き御年ばえなり　○七條院　後鳥羽院の御母上　○おろす　給ふ　○をしかるべき　御髪を落すにはまだ早き御年ばえなり　○七條院　後鳥羽院の御母上　○おり給ひ　御位を讓る　○土佐院　土御門院　○佐渡院　順德院　○天の下には　おなじ事なりしかば　御位を讓りても天下の政治は在位の時も同じ事なれば　○津の國の　○こやのひまとも　葦にて葺きたる小屋の　○藐姑射の山　仙人のすむ山、仙洞、靈の洞さもいふ、それより上皇の御所のことにいふ（以下は上皇のかぎりなく榮えさせしたまへるなり）　○霞のほらに　はこやに同じ　○のどけくて　世の中治り靜かにて　○ありありてにありて　○よしなき一ふしは　事のこさに　○三上皇を初め皇子だちちりぢりに遠國にうつされ給ふ　○おのがちりぢり　○さすらへ　海邊の漁夫の小屋の中に交りて　○磯のとや　○ことゝとふれる　○あま小舟　漁師の舟　○それま

幾日（いくか）と問（と）こ　○うしろめたさ　不安心になるに、○いつをはてとかくの如きわびすまひはいつを限（かぎ）ともわからす、各院宮々の再び御對面のほどを知れぬ御有樣　○雲（くも）の浪（なみ）　遙かに遠きをいふ　○おはします處（ところ）　隱岐の國なり　○海（うみ）づら　海面　○かたそへ（かたよせる）　○げしきばかり　したり（家の形）　○こととそぎたり　簡略（そま）、そまつである　○柴（しば）のいほり　新古今集

四行の歌に、「いづくにも住まれすればたゞすまでおらん柴のいほりのしばしなる世に」とあり

なまめかしく　簡略なれども、品よく風流に　○ゆゑづきて　何となくわけありげに　○しなさせ　作らせ　○水無瀨殿（みなせどの）　後鳥羽院の離宮にて攝津國水無瀨川のほとりにあり　○二千里（にせんり）の外　ほかはるばると海面をながめやることこと、伯樂天の詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心」とあるをさりていへり　○今さらめきたり　今更（いまさら）の感じがする　○こちたく　甚しく、ことごとしく　○われこそは　我こそこの島に遷されて新にこの島守となりしか者、沖ふく風よ注意して荒く吹く勿れの意　○同じ世（おなよ）に　今こそ新の如き遠隔の島に流されて島守の身となれるが、同じ世に（同じ世に）再び都に歸りて住吉の月を見る事もおらんかこの意

六、雁の涙（かりのなみだ）

○題（だい）しらず　歌の題がわからぬ　○なきわたる　秋の日の物思ふ宿の萩の上に白露のおけるは空をなきわたる雁のなく涙がおちて露となりしならん　○うへのをのこども　殿上の人々　○川せうえう　川邊逍遙にて川あそびの事　○紀貫之（きのつらゆき）　古今集の撰者にて平安朝の歌人なり　○あるかなの意　○しら雲に　空にど　○是貞（これさだ）　○壬生忠岑（みぶのたゞみね）　平安朝の歌人　○わびしけれしさび　○な　夜長月の意にて九月のこと　○夕月夜（ゆふづきよ）　くらいといふ枕詞　○内侍（ないし）のかみ　内侍所の長官　○凡河内躬恒（おほしかうちのみつね）　平安朝有名の歌人　○ふくからに　吹くが故に　○おきつしら浪　沖の白浪も共に聲を添へるとなり　○在原元方（ありはらのもとかた）　○世（よ）の中（なか）は　世の中はいかばかり苦しく思ふらん、多くの

（こゝらの）人に讃みらるゝ故に　○惟喬　○正月　○業平朝臣　在原業平、名高き歌人なり　○わすれては　君の御有樣を忘れては夢のやうに思ひしに、今はからずも雪をふみわけて御目にかゝらうとは思ひもよらぬ（思ひきや）ことで嬉しく思ひまゐらするとなり

七、理想　最上最高の眞理と考へたる觀念

○一旦夕　一朝一夕といふに同じ　○徐々　ぼつぼつ　○著々　ちやくちやくと　○勇猛精進　勇氣を出し一生懸命に修行する　○名聞　外聞（名譽、評判）

○輕擧　かるはづみの行ひ　○歳華　歳月　○白駒の隙を過ぐる　歳月の流れて早きたとへ　○忽焉　すぐに

○毫釐　わづかにても　ちよつとでも　○耳已に蟬鳴を聞き　年老いて耳が蟬の如くなる　○鬢已に霜色を現ず　頭髮が白くなる

○明日ありと　今日見なくともまた明日もあるからと心に油斷をすると、はかない櫻の花（仇櫻）に夜の中に風が吹いて散らさない者とは限らぬ、人事又斯の如くなすべき時に猶豫なくなすべし、明日を賴む勿れとなり　○矛盾　矛はほこにて人を殺す兵器、盾はたてにて矢をふせぐ兵器、矛を造る者と盾を造る者とは其用途の目的を異にするより反對するの意に用ひる

○讖誡　いましめ　○浮屠氏　佛者　○煩惱即菩提　色々の思ふ慾心はとりもなほさず菩提（無慾の佛の心）心である　○平等即差別　平等は則差別である

○常住　一家不變の眞理　○會し　了解する、さとる　○會得　了解　○墮獄　地獄におちる　○因循　ぐずぐず

○躊躇　ためらひまよふ　○全分實現　全體を實際にあらはす　○盡忠　誠意をつくす、まめやかにつとめる　○刹那　ごく短かい時間

○未得　まだ自分の物にならぬ　○既得　既に手に入る　○腸を斷つ　はらわたをちぎる程の苦痛○斷腸の思ひ　○芭蕉　徳川時代に於ける俳諧の名人、正風の一派を開く

○融會自在　充分に會得する　○如意不斷　たえず心中にゑがく

八、人の心

一、驥のたぐひ

○下愚　極めておろか　○大路　かいだう　○驥　よき馬　○舜　支那の聖帝（聖人のこと）　○徒然草　兼好法師の隨筆

二、心の主

○すゝろり　みだ　○鼻　○せかれねれぬ故　じやまさ　○所得顔　わがものがほ、　○虚空もの　こくうしま　○念々心のおもひ　ねん〳〵いろ〳〵の

九、春夏秋冬四篇

一、雨後の花

○みやび　○艶美　はなやか　○ばうぞく　凡俗にてげひんのこと　○やごとなき　貴　○つゝましむ、　遠慮　○むさゝたん　ひやう　○矢立　○かうより　撚紙　○われはがほ　得意顔　○風情す　ふぜいやう　○はやてに　俄　○かげろふ　かげ　○いさゝご　砂　○いといたう　○吹き起す風　○つらさや　花を見捨てゝかへるつれなさを擧ぶが

ごとし　○よためき　うろたへ　○なる神　かみかみしくなり　○心おごり　心にたかぶる、先のこと　○思ふ時は　この下に「注意すべし」を加へて解すべし　○松平定信

二、泊泊舎にて蓮を看る

泊泊舎は清水濱臣の家の號なり、下谷池の端にあり

○大比叡　ひえ　近江の比叡山　○比良　ひら　の大わだなす　近江の琵琶湖（大わだは大海）なずは「如く」の意　○おほせたる　おはせる、つけたる（即泊舎なり）　○あらがねの　枕詞　○土　つち　さへ裂く　夏の盛なればいふ　○ゆはた　しぼり　○宮路　都の大路　○衣笠　きぬがさ　天蓋、絹布にて張りたる笠　○わらうだ　藁にて作れる圓き座ぶとん　○五百津　いほつ　つどひ　たくさんにつないだ玉　○いろくづ　魚類　○おばしま　○欄干　てすり　○みづ枝　えだ　みづみづし　若葉の枝　○衣の紐　きぬのひも　を解きさげ　暑さに帶紐をときゆるめてくつろぐなり　○たとし　たとふべきかた　○えならぬ　何ともいへぬよき　○西の湖　にし　支那の西湖をいふ、東京河内省會德府永順縣にあり、風景絶佳を以て世に鳴る、故に

我國の詩人、不忍池を小西湖と稱す　○異國の書　漢書　○さる方の友垣　その方（漢學者）の友だち　○丹塗　赤くぬる　○唐兒　支那の子供、支那江南の俗、婦人達をさりて戯さずことあり　○日の入る國　西の國（日本を日の出づる國といふに對していふ）　○法に心を寄する　佛法に歸依すること　○上の品の臺　極樂に八功德水の池あり、その池の蓮の臺に座するをいふ　○あれ出で　出る　○よび出づ　吟出する　○もだもあらず　だまつても居られず　○なべて世の　清き心の人の友とすべき花はこの蓮の花なりとの意　○しのぎし　さほして　○ふくめる　つぼむ　○をち方　遠方　○加藤千蔭　加茂眞淵の門人にて國學者なり、和歌和文をよくし筆蹟に巧なり　○うけらが花　千蔭の歌文集なり

三、江の月

○つゞりさせてふ蟲　つゞりさせといひてなく虫、きりぎりすのこと（秋になり寒くなる故衣服をつゞりさせよといふやうにきこゆるなり）　○いにし　去る

○たゆたふ　ぐずぐずする　○長月のかげ有明になりなむ　九月もなかばすぎて殘りすくなくなる（九月末）　○寢待　○ゆくりなく　用意もなく急に　○率ふる　つれる　○つぶやき　小言をいふ　○物せむ　月見をする　○心あての　あてにして　舟長居た船頭　○寢おびれ　ねぼける　○ないがしろ　ぞんざい○しどけなく　○をりしもこそあれ　今夜でなくてもよき折もあらうに　○面もち　かほつき　○すさまじげなるものから　興ざめがほであるが　○舟あそび　出船の用遊　○なかなか　却ての意、却って無駄である　○けにりて　○かゝやう　かくの如き　○水馴棹　船をやる棹、一首の意は、棹さして我が月見にこなかつたらばこの月は水の上で誰も見る人もなくひさりで空しく照らすことならんとなり　○ほこりかがほに　じまん　○うそぶく　つぶやく　○むくつけき　氣味わるい　○すみ渡る　すみわたるこの月に來給ひし君の船の友として漕ぎ後れて來れる人はこゝにある、强ち君ひさりの月見にてはなきものをとの意　○いざなはばや　誘はんか　○從者　ども（供）　○客人　○ものぐるはしき　氣ちがひじみた　○お

くらかされぬる　こりのこされぬる　先んぜられたる　○せんぜられぬる　○舷（ふなばた）　○うちあげげる　擊をあげる　○野矢常方（のやつねかた）　國學者和歌をよくす　○蓼園集（れうゑんしふ）　常方の歌文集なり

四、雪中の眺望（せっちゅうのちょうぼう）

○離（かがり）き　○山となり　山のごとくになる　○妹がね　妻　○ほだ　楫、たきゞ　○態（かめ）利　酒德　○蓬が庭には蓬なゞし　庭の生ひ茂り　○玉しき　雪のふりつもれるなり　○わたし　遠く見やる、見わたす　○見さくる　遠く見わたす　○そくへのきはみきたるはて　うしろへ退くへの極み來たるはて　○刀根の川　浪川利根　○水上　○秩父　○五百重山　○たゝなづく　かさなり合ひつゞく　○なつらふ　秀で、高き（他にくらべろ）　○時じく　季白雪をいたゞく　○つぎていて　○はゝかる　一ぱいにひろがる　○うつらうつらうつつ　○見つゝしそれば　見て居れば（しは詞をつよめる辭）　○片ひらき　半分開きたる　○

ひとりごち　ひとりごといふ　○橘守部（たちばなもりべ）　德川時代の國學者

一〇、いざよふ月（つき）

○ふみの名　孝經（こうきょう）ふみの名なり　○夢（ゆめ）ばかりもすこし　○みづぐきの岡　をか　讃岐國にあり、葛の名所なり、葛の葉は風にうらがへるもの故、けりなり　○葛葉（くずは）かへすがへす　葛の葉かへすのかけ詞に用ゐたり　○かひなきがない　きゝめ　○さてしもあらで　そのまゝにすておくことならずて　○このうれへこそ　子を思ふ道　○あだなるすさび　わけもないなぐさみ事　○神樂（かぐら）　○ひじり　聖賢（紀貫之は古今集の序に世を治め云々書けり）　○ためし多かれど　數をうけて和歌を撰びし人は古來其の例多けれど　○代々に　時の帝に　○もゝち　百　○反古（ほご）ぐ　○えにかにや　因緣　○道をたすけ　歌道を起す　○はぐくめよ　教育　○後の世をとへ　後世をむらへ　○細川のながれ　細川の領地の末　○せきとゞめられ　細川

の庄を故なく押收せらる　○法のともし火（後世を吊ふ爲めに佛前に供へる燈火）　○きえをあらそふ（消えることを競ふ、あぶない）　○忍びへる（こら）　○あづま（鎌倉幕府）　○龜の鑑（裁判を受ける）　○えうなき物（無用のもの（はかなきものと覺悟するなり））　○ゆくりもなくに（不意）　○み冬（ふゆみは接頭語）　○ふりみ（降つて見たり）　○ふらずみ（やんで見たり）　○きほふ（競ふ）　○人やりならぬ（他人をつかはすことのできぬ）　○いき憂し（行くことがつらい）　○めかれせざりつる（目を離さなく、常に見て居る時でさへも）　○ましてと（自分が行つてしまへば猶更荒れはてるであらふ）　○袖の雫（なごりを惜む涙）　○いひこしらへぬ（すかしだます）　○十六夜日記（後大納言爲家の室阿佛尼が書けるものなり、爲家歿して、其子爲相の庶兄爲氏なるもの、所領細川莊を預かりて返さゞりしかば、阿佛尼その訴訟のため鎌倉に下りし時の旅日記なり）

二十一、祭のことば

○平春海（ひらのはるみ）（氏は村田、春海は其名、學和漢に達し尤も歌文をよくす、眞淵の門、千蔭と同窓の友なり）　○芳宜園大人（はぎぞのたいじん）　○くつきらうお　○ぬかつき（かしらをさげる）　○かも（かなに同じ）　○このかみ（兄）　○そのかみ（むかしありし）　○童（わらはこ）ども　○縣居（加茂眞淵の家號）　○御はかし（佩刀）　○あひうるはしみ（互になかよく交はる）　○はらから（兄弟）　○おととひ（弟）　○つらなみ（列）　○世のさが（世間のことがら）　○かゝづらひ（かかりあひ○關係）　○うきこと（憂ふべきこと）　○はたとせ（二十年）　○つねなき（無常）　○心しらひ（こゝろばえ）　○しづ機の（枕詞）　○みやびごと（風雅）　○株を守り（舊き習はせになづみて時勢に應ぜざる故事、韓非子に、宋人田を耕すあり田中に株あり兎走りて株に觸れ頸を折きて死す、因りてすきを捨てゝ株を守りて兎の又來らむことを求む、されど兎は再び來らず、宋の人皆之を笑ふとあり）　○舟にきざつくる（これも同じ意にて舊法を固守して移らぬ故事、昔楚に江を渉る人あり劍を船中に置きしに劍河中に落つ、その人、船に刻して是劍の落ちし所なりとて之を探せしも、その時船は已に進行せしが故に劍の落ちし所と異なりたりし故に遂に劍はなかりきといふ。）　○たまあひて靜（靖）

扶合する　○うづなひうべなふ　○寧楽奈良朝らねば　○金の聲こゑ立派なる　○玉の響ひゞき金聲に同じ　○ことあげいふ○申上ぐる　○天がけり空を飛ぶ　○琴後集集めたるもの

一二、三神山　その一　四條天皇の崩御のことを述ぶ

○源大納言通方　○阿波院　○おとなび生長し給ふ　○警策ぐれるをいふ　○あたらしさ惜し　○大納言こん通方の　○暦仁　○何を待つとしもなく　何を期待するといふ事もなく（御践祚の御望さてもなきをいふ）　○かゝつらひて世にくづ〳〵こと挙して（もの事に關係する事（うき）　○人わろくよくない　○内のおとゞ内大臣親　○宰相の中將　○通宗　○猶この世の中に云々　父帝土御門院は遠島にうつされたれば、この世におはしまさゞればし給ふ程に　○おもておこし面目を施す　○價なきゞ價のほど分ましめにてなりて　○承明門院土御門院の御母君　○御冠元服のこと（元服は十一歳より十五歳までを限りとすべきに藏みろ人もなき故二十歳になり給ふまで元服のゆかぬなり）　○城興寺の宮僧正眞性の御子　○御弟子にどかたらひ家し給へを勧めて出家などゞさせしがらぬ事　○石清水山城國綴喜郡にある八幡宮　○御念誦の御いのり　○まどろませたまふ　○稚き　○愍しくんじする　○まめだち精を出すする（ずんしは誦じなり）　○御覧じあげ目をさまして空を見あげ給ふ　○椿葉の影　○うちずんじ　○けざやかいふに同じ　○神さび　○とまれかくもあれ夢の不思議なりしことばさにもかくにもいづれにせよ　○ほどほど分にその身分によりて　○ひはひ正月の祝ひなり　○睦月正月　○例ならぬ御病氣のこと　○七日の節會正月七日白馬の節會を行ふ、天皇紫宸殿に出御あり

て白馬を見給ふ儀式なり　○御帳　帳はとばり、出御なきをいふ　○さうざうしく　ものたらず、さびしく　○のゝしりあへる　やかましくさわぐ　○なかなか　かへつて　○女御　中宮につぎての女官だち　○童あそび　こどもあそびをする程の　○むつれ　天皇にむつまじく親しくし給ひしに　○うたていみじければ　うたては憂ひ悲むこと、いみじは甚だしきをいふ　○うちしめり　かなしむ　○らうたし　可愛らしい　○せうと　兄上　○御門のおなじ御ほど　四條天皇と同じほどの年齢　○かいひそみて　ひつそりと静まる、（かいはそへていふ詞）　○遠き浦々にて　後鳥羽、土御門上皇が配所にさすらへ給ふをいふ　○さゞめくやく　○御惱　病氣　○なべての筋　すべてあたりまへの病氣　○いはけたる　物事に驚くこと、（御あひだのうちに何かに非常に驚かれ給ひしことありて病の本となりし）　○御つぎ　御よつぎ、御あさつぎ　○いかになりゆかむずるにか　どうなり行かんとする事か　○たどり　まよふ　○さてしもやはとて　さてもそのまゝにしておくべき事にあらずとて　○御後見　執權職をいふ　○小弓　揚弓の類にて當時の遊戲なり　○はしり馬　早馬のつかひ　○神事はじめ　神に祈りをはじめる　○鬮をぞとりける　天子につけ奉るべき皇子を定めん爲鬮を引くなり

一三、三神山　その二

嵯峨天皇即位のことをのぶ

○うかびたる事　こういたこと（いろ/\のうはさなり）○浮說　○心のひきひきさまゞに　人々心のさまゞに　○いひしろふ　いひ爭ふ　○佐渡の院の宮たち　次の天子は順德の皇子だちかなど評判するとなり　○修明門院　順德院の母重子　○ときめきこともあらんかと思ふなり　○承明門院　土御門院母在子　○もしやなど　もしも土御門院の皇子が立つならんかと　○いづ方　使者のどちらの方へ　○ことわりに　もつともにて　○今見ゆべき　今にわかるなれども　○さ覺ゆるわざ　さやうに思はるゝ事　○例の口すさみて　例の如く口をすぼめて、（齒の拔けたる老人の物語るさまなり）この增鏡は老尼の物語を筆記したるさまに記したればなり）　○日ぐらし　日のくれるまで使をまつなり　○城介義景　關東の使者なり　○青侍　まだ年わかく未熟なるさむらひ　○うつゝともおぼえず　現實

こも思はれず（夢の様に思はれて）　○葎（むぐら）つよくかため（草一面に生ひ茂りて）　○郎等（らうどう）（けらい）　○とかくさせて（いろいろにしてや）

つぎ門な開くなり　○おのづからの事（こと）もや（自然さういふ事もあらんかさ）　○なえばめる（ふるびてなえたるなり）　○烏帽子（ゑぼし）

○直衣（なほし）公卿の平服なり、之を着て君前に出づるは許可を得ざるべからざるなり　○中門（ちゆうもん）貴人の邸宅には對屋といひて寢殿に對する條殿あり、それより南行に廻廊あり、これを中門廊といふ、廊の中ほどに門あり、之を中門といふ、客ある時はこの中門にて取次をするなり　○切戸（きりど）中門の戸のわきの出入口の所をいふ　○阿波（あは）の院（ゐん）土御門院の院

○おとなひ（うはさ）　○四辻殿（よつつじどの）　○物思（ものおも）しも（ものおもひ）　○ひきいれ（元服の時、冠をさりてきせ奉る役をいふ）　○理（り）

髪をそぎて髪きめる役　○頭辨（とうのべん）藏人の頭に辨官を兼ねたるもの　○冷泉萬里小路殿（れいぜいまでのこうぢどの）四條大納言隆親卿の家　○閑院殿（かんゐんどの）先帝四條天皇の皇

居　○踐祚（せんそ）天子の御位につく（先帝崩じて皇太子御位をつぐを踐祚といひ、後に更にその大禮を行はせらるゝを即位といふ）　○よろづあるべきかぎ

りもの意　○光明峯寺殿（くわうみやうぶじどの）　○御禊（みそぎ）十月廿一日大嘗會御禊あり、加茂川に行幸ありて御身を清め給ふなり　○思ひよりし事（こと）

かし思ひ設けたる事ならんや、　○大嘗會（だいじやうゑ）十一月廿三日に行はせらる、即位の年始

かりはおもひもよらぬことなり　めての新嘗祭にて天皇御一代の大禮なり　○悠紀方（ゆきかた）大嘗

會の祭場を東西の兩所に分つ、東を悠紀方といひ西を主基（すき）方といふ、天子まづ悠紀に出御して神事を行はせられ、次に主基方に遷らせらる。即悠紀方に用ゐる屏風の歌は爲長作られしなり　○

三神山（みかみやま）歌の題なり　○菅宰相爲長（くわんさいしやうためなが）　○いにしへに名（な）を云々（古より名をのみきゝて求めたりといふ三神の山はそれである）

○主基方（すきかた）悠紀方の所を見よ　○末遠（すゑとほ）き　まだ二葉なる石嵜の松なれば行末遠く榮ゆべしとなり（天子の御年もおわかき故、千代も八千代も末遠く榮えたまふべしとの意）

○當代（たうだい）只今の天子（後嵯峨）　○實氏（さねうぢ）のおとゞ　西園寺大政大臣公經の子　○二（に）なく　ふたつとなく、この上なく　○清（きよ）ら　立派　○

無品親王（むほんしんわう）位のなき親王、（親王には品（ほん）といひ臣下には位といふ）　○思（おも）ひより　天子の位に上らんとは思ひよらざりきとなり　○さはとかく　左様にいろいろ

聞（きこ）ゆべしと許判する

一四、三神山（みかみやま）その三

この巻は「門野の雪」なれど、つゞきたるもの故「三神山」の中に加へしものにや

○そのかみ（以前、まへかた）○わらはやみの○瘧（おこり）源氏の中將病氣のまじなひに北山の某寺にこもりしこと源氏物語若紫の卷にあり○ゆゝしきりっぱな○伯三位（白川顯廣王の子資仲神祇伯正三位）○ひたぶるに（一向まつたく、）○たゝずまひす（やう）

○池の心ゆたかに（古への池の作り方は心の字の形に作り、即ひろ〳〵と池をほりて）○わたつ海をたゝへ（海の如く廣く水をたゝへ）○涙催しぬべくし（よき景色に感じ入るばかり）○本尊（寺の主として本尊まつる佛像）○たへい（尊）○生身（生きて居る形（生きた人のやうによく出來たる）

り）○ふりたる（ふるく老いたる上に）○うそぶき（歌をよむこと）○をにも（山の尾、ふもと）○見ぬ世（さきのよ、（後世の人が自分の生きて居る時の樣な思ひやるやうに櫻も植ゑおくとの意）○いみじきためし（非常に立派な例）○世繼（大鏡といふ書物、増鏡以前の歷史をかけるもの、世繼物語ともいふ）○これはといふ（西園寺）○おほぢ（祖父）○をさをさ（なか〳〵、決しての意）○世のおもし（天下の重臣、おしすめ、）○きざみ（際、時）○もしやなど（もしもわが子の天子になる事もあらば再び都へかへり給ふこともあらんかと）○へだたり

のみはてぬる世をしまった（全く隔たって）世を○そこはかとなく（どこがわるいこともなく）

一五、玉づさ四篇（玉づさは手紙のこと）

一、小澤蘆庵主のもとに

○千さとのり（千里（遠き道のりの事））○こゝら（許多、多く）○うちつけなるものから（だしぬけのことながら）○唐突○たちかへる春（新年）○ほぎこと（御祝詞（およろこび））○もゝ世（百年（長く））

二、人の許より氷をおくれるに

○つちさへ裂く（地面もひびわれるといふあつい頃）○わらはも（小ども）○めでくつがへり（非常にうれしがり）○おほやけのもの（天皇の御飲料）○いぶせき（むさくろしい）○伏屋（小屋）○心やりぐさ（なぐさみの物）○かしこ

きわざなきこそ（もったいないこと）　○御まのあたりつて（お目にかゝって）　○あなめづらしな（あゝ珍らしきことかな（なは感嘆の詞））

三、月の夜友のもとに

○いざたまへもろともに（どうか月見にお出で下さい、御一所に）　○所せきつぼ（場所のせまい庭）　○なりどころ（別荘）　○あるじまうけ（御馳走）○饗應　○ありきたがひて（いきちがひて）　○あらぬほどならば（留守であったら）　○律師（僧の）庵　○塵をよそ（俗塵の外、世のなかをはなれた）

四、雪の朝友のもとに

○いつしかとのみ（いつ雪がふるかとばかり）　○たゞすまひす　○かゝらぬをりだに（こんな景色のよい折でなくってさへも）　○あたらしく（あったらもの、残念に）　○よし蹤つくとも（たとひ雪にきたない足あとをつけても）　○をかし（おもしろき）

○思はずに（思ひやりがなく、意外に）　○さりとも見過しがたく（さてもこの景色を歌もよまずに空しく見過しがたくは思はるゝといふ事ならんが）　○しろしめすやうに（御承知の通り）　○うひうひしき（初々しきにて、まだ未熟なる）　○筆のしりとる（歌を添削してくれる）　○博士（先生）の意　○そこには（あなたには）　○心ふかき言の葉（極めて面白き和歌）　○せばき庭（自分の庭を謙遜していふ）　○さうざうしさ（ものさびしさ）　○鳥の迹（文字）

一六、富士山

○千種有功（ちぐさありこと）千々廼舎と號す、權中將正三位に至る、有名の歌人、安政元年八月歿　○千度見て云々（いくたび見ても見るたびごとにめづらしい）　○すがたさだめぬ（或時は雪を戴き、或時は霞にうすく四季いろいろと形がかはる）　○しば山（芝山は樹木のなき山のこと）　○心あてに云々（雲がかゝりて富士を見えぬ時に、あそこの白雲のあたりが富士の峰ならんかと心あてにして居つたら、雲はれて見ると思ひもよらぬ高い空に聳えて見えた）　○いかづちのなり（かみなり）　○荷

田春滿 有名の國學者、京伏見稻荷神社の神官にして眞淵の師なり、元文三年七月歿　○天地は 天と地とそれほどには、なれてはないとの意　○山部赤人 柿本人丸と並びて日本の歌聖と稱せらる奈良朝時代の人　○時ゆ 時よりの意　○かみさびて かうがうしく　○あまの原 大空のこと　○ふりさけ見れば ふり仰ぎて遙かに見わたせば　○かくろひて 富士山の爲めに日のかげもさまたげられてかげる（高くして日光を覆ふをいふ）　○いゆきはゞかり 雲も頂上まで行くことが出來ぬ（いは接頭語なり）　○時じくぞ 春夏秋冬たゆることなし　○かたりつぎいひつぎゆかむ かくの如く雄大高壯なる富士の山は子孫代々後の世までも傳へてほめる事ならん　○眞白

一七、鉢の木　その一

謠曲なり、北條時頼隱居して下民の狀況を見んとて諸國を行脚して上野國佐野常世のわびずまひに宿りてその落魄を救ひし筋なり、この事本謠曲に見ゆるのみにして正史に見えず、夫とあるは常世、婦は其の妻、僧は時頼なり

○一所不住 一所に住家を定め居らぬ　○沙門 僧侶のこと　○淺間の嶽　○遠近人　○大井山 信州佐久郡　○[illegible]の里 伴野といふ、佐久郡にあり　○離れ阪 これも信州の地名　○うす氷川　○筏　○板鼻 上野にあり　○佐野の渡　○あら笑止や あゝこまつたことよ　○いかに 人を呼びかける詞、まうし／＼といふ如し　○申さうずる 申さんの意　○ともかくも 御勝手　○鵞毛の 鵞鳥の毛　○鶴氅 鶴の羽衣　○徘徊 ゆきつもどりつ　○袂も朽ち 身の貧しくおちぶれし有樣をいふ　○細布衣陸奥の けふのかけことばなり　○たゝずみ立ち ぼんやりとたちとまる　○さん候ふ 左樣に候ふ　○平に ぜひ　○體あり 體さま　○なかなかして　○曲もなや なさけなき事かな　○よしもなき 益もなき　○前世の戒行 さきの世の修行　○値遇 めぐりあふ　○然るべくば なることならば　○なうなう 人を呼ぶ時のことば　○聞えぬげ 聞えぬ樣子　○三輪が崎 紀州東牟婁郡にあり　○一樹の蔭 一本の樹の陰へ立よりて共に雨やどりするも　○この世ならぬ契 さきの世からの因緣　○軒ふり 家があれふるびて　○うき寢ながらの草枕 野原などは憂寢（うきね）すると同じ旅やどりであるの意

○夢まり霜や結ぶらむ　夢の中にも露がおくだらう、即寒さ一夜を明かすもならんとなり

一八、鉢の木　その二

○いかに申し候ふ　何と申すぞ　○なにても候へ　いかなる粗末の物にもせよ　○折節　○飯　○日本一のこと　大へん結構の事　○世にありし時　かくおちぶれなかつた時分　○盧生　唐の開元七年に盧生といふもの邯鄲の地に至る、呂翁といふ道士ありて枕を貸し與へらる、盧生しばし寝れし夢に五十年間の榮華の夢さめたり、其寝る前にしかけたる粟飯が丁度出來上りたりといふ、これより盧生が夢とも邯鄲の夢、一炊の夢ともいふ　○邯鄲の枕　○一炊　一炊の粟飯のたく間　○おもひでたまり　思ひ出す　○鉢の木　鉢に植ゑたる木、植木　○木數寄　○祕藏　○埋木　土中に埋もれたる木　○難行　なんぎやうなんぎして行をする　○法の薪　佛の爲めに用ゐるたきぎ　○捨人　世をすてた人、僧　○苔木　○折かけ垣　折りかけて作れる粗末の垣　○かねて思ひきや　前より思つて居らうか、思ひもよら[illegible]　○わぶる　悲しと思ふならん　○わびて住む　わびすまひ、苦しきくらし　○ひ櫻　火櫻（火にくべる故）緋櫻をかけたり

○御垣守　宮中の御垣を守る役人　○衞士　宮中守護の兵士なれども、こゝは仕丁（しちやう）の事、仕丁は庭中の掃除などする者　○たゞ人　普通の人　○自然の時　自然と何か事のありし時の爲の爲に聞いておきたし　○なれる果　おちぶれ果てた身の末　○散々の體　ていたらくのなきあさましきありさま　○押領　領地を無理に奪はれる　○御沙汰　おもてざたといふに同じ、裁判のこと　○最明寺殿　○具足　よろひかぶと　○とつて投げかけ　取つて身に着る　○著到　かけ集つた者の名前を帳面につけられる　○なんぼうほど　どれほど　○よしや身の云々　たとへかゝるおはれの身となりても、いかでこのまゝに朽ち果つべきや、わがこの世に生きて居る間（世の中におらんほど）はわれをたよりにせよ（たのため）となり　○ゆきの日の　雪に行きをいひかけたり　○かり衣　かり衣（狩衣）は旅の衣なり、ころもかり衣宿を借るにいひかけたり　○希有がる　○法師　めづらしい僧　○かひがひし　○公方の縁　鎌倉幕府へとりなす縁を結ばんとなり　○御沙汰　訴訟　○出ではなけれども　そなたの力になる程の身ではなけれど

出舟ばとも舟の縁語なり

○勢兵　卯の花などしなどあり　○白金打ちたる　銀のがなものを打ちたる　○絲毛の具足　そくよろひの小札（こざね）を綴り合せたるを糸毛といふ、ひをどし、黒糸をどし

○かひに飼うたる　十分にかひ養ふ、（よくこえふとりてたくましきをいふ）　○打物　太刀かなた　○物そのものにあらざる氣色　これと目をとめるほどの物にあらざる様子（みすぼらしく粗末なるをいふ）　○所存　忠を思ふ心　○上意　おかみのおほせ　○なかなかのこと　左様に候ふの意、當時の俗言なり　○某が敵人　拙者を敵と思ふ者が　○謀叛人と申し上げ　拙者を謀叛人なり

[illegible]言し[illegible]　○ためなあるよ　ためで　○力なし及ばぬ　ぜひに　○大床　大ひろま　○きらる　綺羅（立派なるをいふ）　○横縫

[illegible]　○古仮名の一種　○神妙　けなげ　○奇特　○勢使　軍勢の使こと　○當參　今参つたる　○切なり

[illegible]　○自筆の狀　將軍自筆の知行を賜はる狀　○安堵　○たび　給ひ　○佐野の舟橋　萬葉集の歌に「上野の佐野の舟橋とりはなし親はさくれどわはさかるかへ」とあり

二〇、世界の四聖　その一
聖は智德の圓滿無缺の人をいふ

○宗師　師となる柱となり　○儀表　世のてほん、のり　○釋迦　○孔子　○基督　○宜なるかな　もつともな事である

○伽毘維國　ヒマラヤ山下、ガンジス河の上流にあり　○淨飯王　○摩耶夫人　○悉達多　○族名　種族の名稱

○佛陀　○出家成道後　妻子をすて、修行の爲家を出て人生の大道をさとりし後　○奥儀　ふかきこと、眞理　○正覺に徹底さ

りをひらく　○巡錫　めぐりまわる　○跋提河　○哲學　宇宙の眞理を研究する學問　○思索　かんがへ、研究　○欽び　○

幽玄　おくぶかい　○談理　理をかたる　○慘憺　むごたらしい　○苦行　くるしい行　○流派　學問の流儀　○元々　百姓　○

歸命 天命を信じて心を安んずる　○無邊 かぎりなき　○木鐸 人のみちびき（敎令を布くさきならす鈴）　○歸依 歸したのむ　○丘　○會國　○令聞 よき評判　○擢で 多くの中よりえらばれる　○大司寇 三公の一なり　○治績 政治のできばえ　○想望 したひのぞむ　○齊王　○老軀を挺し 老年の身をひつさげて　○高足 すぐれた門人　○遊說 自分の說をのべまはる　○蕩然 大に衰へすたれたるありさま　○地を掃へり ほろびてなくなる　○食み　○陵夷 おとろへる　○頽廢 すたれる　○慨然 なげきいきどほる

ちがた　○故國 生れた國　○狂瀾を既倒に飜さんとす 高き浪の今にもくづれかゝれるをもとへもどす（衰へたる國勢を元の如くに引きかへす）　○漂浪 さまよふ　○名敎 大義名分　○老脚蹉跎 老いたる足もよろ〳〵とする　○子貢　○夫子 先生といふ如し　○[illegible]り、低い所から[illegible]　[illegible]く學ぶ　○希臘　○雅典　○雕刻師 ほりものし　○奇さ　○詭辯學派 Sophism（ソフィスト派　[illegible]不思議の眞理なし、たゞ人々の觀念[illegible]するなりといふ說を唱へる一派　○跋扈 はびこる、勢力をほしいまゝにする　○空文 たゞ文字の上ばかり　○禆

[illegible]　○時弊 當時のわるしき弊害　○自ら任じ 自分より外にない、それが自分の任務だと信じて一身をその事にまかす　○諄々 親切に、こま[illegible]　○論法 ぎろんのしかた　○一歩も假借せず すこしもゆるさず　○侃諤の正議 強直なる正しき議論　○稀代 [illegible]すぐれた　○風靡 風が草木をふきなびかす如く世の人をなびかし從はす　○喬木 高い木　○群小 多くの小人ども　○讒訴 そし[illegible]へる　○擾亂 まよはしみだす　○抗議 答へ駁する論　○慨世 世の中をうれへなげく　○百世の眞理 後世に至るも動かすべからざる　[illegible]　○傲岸 おごりたかぶる　○不遜 けんそんせぬ不禮の者　○泰然 おちつく、平氣　○命のみ 天命なり、時の運　○脫[illegible]獄[illegible]る　○輙ち　○何爲るものぞ 何如なるものぞ（何でもないものなりの意）　○從容 ゆつたり、ゆつくり　○逝きぬ 死ぬ　○耶蘇　○膏灌がれたる者 救濟者、救世者　○猶太　○木匠 大工　○豫言者 未來の出來事をいひあてる人　○洗禮 身體を清めて信者となる儀式　○傳道 布敎して道を天下に傳へひろめる　○迫害 人より難儀な目にあはされる　○福音 よき敎へ　○萌

芽（きざ）し　○胚胎（はいたい）こもる、できる、生ずる　○災異（さいゐ）わざわひやあやしきこと　○荐（しき）りに　○寧日（ねいじつ）安心な日　○收斂（しうれん）人民より租税を重く取立てる　○侮慢（ぶまん）あなどり　○淫祠（いんし）みだりなる神　○放縦（はうじゆう）ほしいまゝ、勝手きまゝ　○缺焉（けつえん）大人物をのぞむありさま　○渇望（かつばう）深く望む（のどかはきて水を望むありさま）　○使命（しめい）を負（お）へる　天の命令を身にうけて　○昂然（かうぜん）精神を高くもつ　○靡然（びぜん）　○磔刑（たくけい）はりつけの刑　○晏然（あんぜん）ゆったり、平気、おちつく　○彼等（かれら）基督を刑せし官吏をさす、彼等がわれを殺す罪をゆるし給へとなり　○哀哭（あいこく）かなしみなげく　○抵抗（ていこう）さからふ　○景慕（けいぼ）あこがれしたふ　○轗軻不遇（かんかふぐう）志を得ずしてふしあはせ　○經綸（けいりん）天下を治めるはかりごと　○詠歎（えいたん）なげき　○讒奸（ざんかん）わるもの　○釘殺（ていさつ）くぎづけにして殺される　○顧慮（こりよ）かへり見る、かんがへる　○歸（き）する　死することを家へ歸へるが如く　○嗟歎（さたん）なげく　○衆生（しゆじやう）天下の人々　○脅迫（けふはく）おびやかす、追害に同じ　○揚言（やうげん）いひたてる、ことばをはりあげる

二一、世界（せかい）の四聖（しせい）　その二

○煩惱（ぼんなう）人間のあらゆるわづらはしき情慾、願望、苦慮　○斷滅（だんめつ）なくする　○涅槃（ねはん）さり、即煩惱を去りて正覺に入る　○我（が）利慾の心　○執著（しうちやく）その心ばかりに深く思ひこむ、しうれん　○脱却（だつきやく）さつてなくする　○究竟（きうきやう）つまり、至り極まる　○百行（ひやくかう）すべての行ひ　○稟（う）く　○後天（こうてん）の氣質（きしつ）教育や習慣によりて養成されたる性質　○これを後天に對して先天といふ　天からうける性質をいふ、　○知德合一說（ちとくがふいつせつ）　○靈魂（れいこん）精神　○垂訓（すゐくん）たれたるをしへ　○極意（ごくい）究竟の意味　○包括（はうくわつ）つゝみこめる　○右（みぎ）の手（て）に爲（な）す所（ところ）云々　善を人になすに知らしむる勿れの意　○鑒（み）たまふ　○是非（ぜひ）善惡を評する　○啓（ひら）かゝ　○窄（せま）く　○磐（いは）　○精髓（せいずゐ）極意に同じ　○色彩（しきさい）を加（くは）ふ　いろ／＼さかざりをつけ加へていふ　○凛々（りん／＼）りりしい、いきいき　○累代（るいだい）／＼　○道念（だうねん）道德上の觀念　○安慰（あんい）なぐさめ○安心立命　○高山林次郎（たかやまりんじらう）文學博士、羽前鶴岡の人、樗牛と號す、明治卅五年十二月歿す　○樗牛全集（ちよぎうぜんしよ）高山林次郎の文章をあつめたるもの

明治四十三年十二月二十五日印刷
明治四十四年一月十日發行

不許複製

發行者
朝野文三郎
東京市神田區橋本町二丁目五番地

印刷者
三浦幸三郎
東京市神田區松田町九番地

發行所
朝野書店
東京市神田區橋本町二丁目五番地
振替口座東京六七五六番

發賣所
各府縣圖書雜誌店

新訂
中等國語讀本卷十字引終

學生自修字書

書名	定價	送費
文部省英語讀本字引（從壹至二）	金十五錢	金二錢
淺田氏英語讀本字引（從壹至五）	金卅五錢	金四錢
スタンダード チョイス讀本字引（從壹至五）	金三十錢	金四錢
ステップ字引（從壹至五）	金卅五錢	金四錢
再訂 新編漢文教科書字引（從壹至五）	金卅五錢	金四錢
新訂 中等國語讀本字引（從一至十一）	金四十錢	金四錢

東京神田區橋本町二丁目五番地
振替口座東京一六七五番
朝野書店

最新刊

重田蘭溪先生著 中野彪

ノート論語

全壹册本㲼天金、縱四寸八分 橫三寸、五百廿餘頁
定價金五拾錢 郵稅金六錢

我が東洋の倫理界に■二千五百年の長壽を保ちながら、璽鑠として尙一方の重鎭たる論語は目下世に行はれつゝあるもの或はその解の難に失して、妙味を嚙出すこと能はざるあり。或は易に陷りて、論語とは、かくも無味のものなるかと、疑はしむるものなきにしもあらざるを以て本書は特に數本の中にて、難に失せず、易に陷らぬ碩儒重田蘭溪先生の原著を得、之を中野彪先生に囑して校訂し、世に公にす。請ふ一本を机上に供へて、その妄ならざることを證せられよ。今、本書の特長の二三を左に掲けん。

本書の特色

解釋 雖字難句は丁寧に之を釋し、各章章意を簡潔に説きたるを以て、論語の妙味を玩味せんとするには最良の友なり。

內容 上段には論語の本文を掲げ下段にその譯文を總平假名附にて載せたるを以て、之を對照して飜讀する時は漢文學の細要を作ることを得るなり。

製本 裝釘は嶄新なる意匠により、最も高雅に、且つ携帶に便なる小形となしたれば、机上における装飾となり、郊外散步には、修身富家の良師となることを得るなり。

容積 紙數は五百廿餘頁の多數なるも舶來紙に印刷してその容積はポケツトに入るゝに足るべく、しかも定價は僅に金五拾錢の廉價なり。

261
781

ノート孟子

重田蘭溪先生著　中野彪先生校訂

全一冊　洋布天金　定價金壹圓
洋八百六十餘頁　縦四寸八分　横三寸　送費金八錢

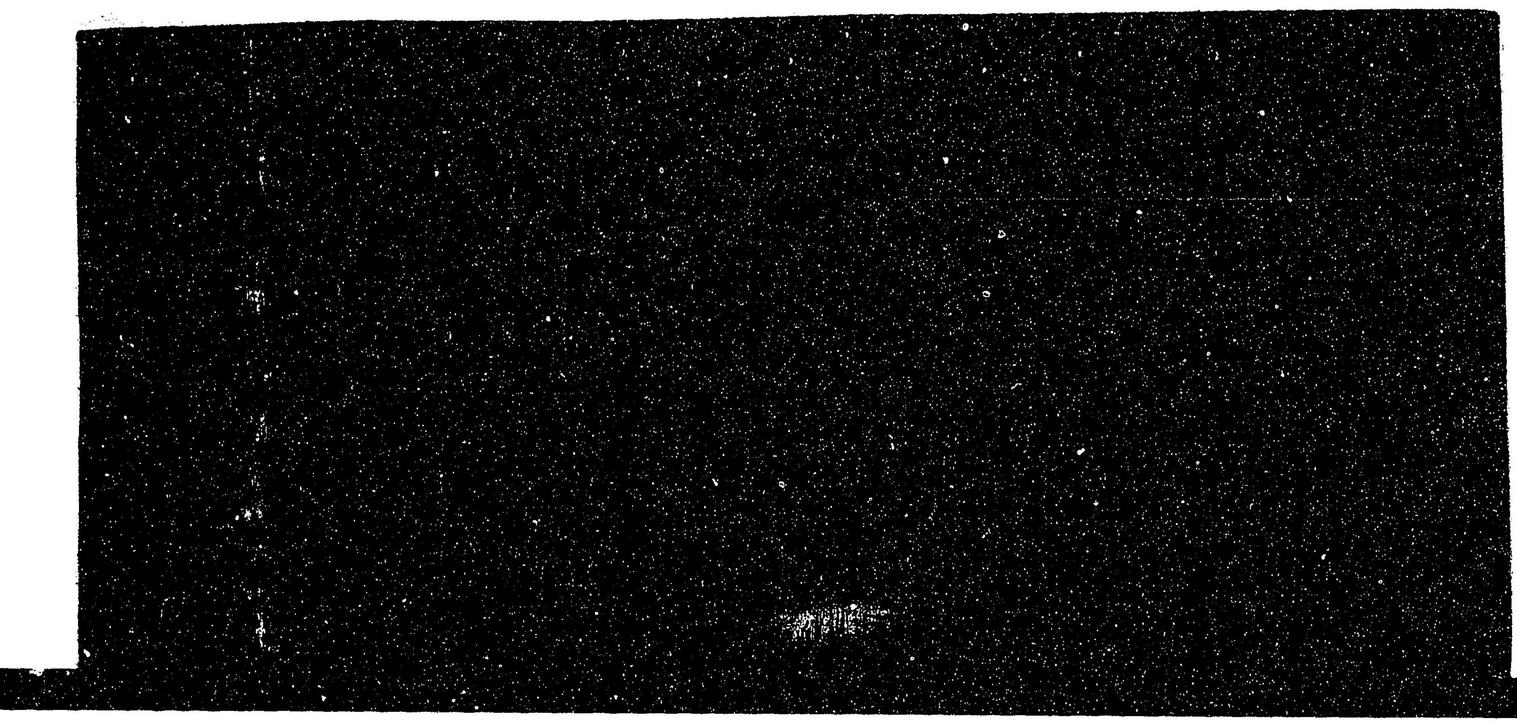
由來我國は仁義の國なり。仁義の國民にして、仁義の眞味を解せざるは、醫にして病を知らざるにひとし。只この一本によりて、仁義の深理を解し得るは、眞に吾人の幸福といふべし。内容は論語を同じく上欄に原文、下欄は譯文總平がな附何人にも讀み易し。

ノート學庸

重田蘭溪先生著　中野彪先生校訂

全一冊　洋布天金　定價金三十五錢
洋百七十餘頁　縦四寸八分　横三寸　送費金四錢

既に論語と孟子とを座右に供へ、ふるゝことを得たれども學庸の缺けたるは、龍を畫き上げたれども一爪の缺けたるが如く、何か物足らぬ心知の爲らるれば、玆に學庸を發刊して龍の缺けたる一爪を補ひ給へよ。



049134-000-6

特65-611

落合氏新訂中等国語読本字引　従一至十合巻

朝野書店

M43

BEL-0007

261
781